

# 県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成 9 年度

川津六反地遺跡  
兀塚遺跡  
多肥松林遺跡  
多肥宮尻遺跡  
尾端遺跡  
住屋遺跡  
原間遺跡

1998. 3

香川県埋蔵文化財研究会

# 例 言

1. 本書は、県道事業及び河川改修事業に伴い平成9年度に実施した川津六反地（かわつろくたんじ）遺跡、兀塚（はげづか）遺跡、多肥松林（たひまつばやし）遺跡、多肥宮尻（たひみやじり）遺跡、尾端（おばな）遺跡、住屋（すみや）遺跡、原間（わらま）遺跡、計7遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会が文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は、次のとおりである。

〈総括〉

〈総務〉

〈調査〉

所長	大森 忠彦	参事	別枝 義昭	参事	近藤 和史
次長	小野 喜範	副主幹	田中 秀文（平成9年6月1日から）	主任文化財専門員	大山 真充
		係長	前田 和也（平成9年5月31日まで）	主任文化財専門員	藤好 史郎
		主査	西川 大		
		主事	佐々木隆司		
		主事	細川 信哉（平成9年6月1日から）		

（川津六反地遺跡）

（兀塚遺跡）

（多肥松林遺跡・尾端遺跡）

主任文化財専門員	中西 昇	文化財専門員	宮崎 哲治	文化財専門員	西村 尋文
文化財専門員	多田 佳弘	文化財専門員	岡本 利	主任技師	溝渕 大輔
調査技術員	中村 文枝	調査技術員	東条 貴美	調査技術員	佐々木明子

（多肥宮尻遺跡）

（住屋遺跡）

（原間遺跡）

主任技師	佐々木正之	文化財専門員	喜岡 永光	文化財専門員	岡本 利
技師	松本 和彦	技師	小野 秀幸	技師	小野 秀幸
調査技術員	滝井 理加	調査技術員	陶山 仁美	調査技術員	陶山 仁美

4. 調査に際しては次の機関に協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）

香川県土木部道路建設課，香川県坂出土木事務所，香川県高松土木事務所，香川県長尾土木事務所，地元各自治会，地元各水利組合

5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柵列    SB：掘立柱建物    SD：溝状遺構    SE：井戸    SH：竪穴住居跡  
SK：土坑    SP：ピット    SR：自然河川    SX：性格不明遺構

6. 本書で用いている方向の北は国土座標第IV系の北である。

7. 本書の執筆は、調査担当職員が分担して行い、執筆者名は目次に記した。挿図の作成・浄書については調査各担当職員以外に調査技術員森川 歩が行った。なお、編集は西村・宮崎・小野が行った。

# 本文目次

I. 調査の経緯と概要 .....	(大山・西村)	1
II. 川津六反地遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(多田)	2
2. 調査成果の概要 .....	(中西)	3
3. まとめ .....	(中西)	9
III. 兀塚遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(宮崎)	10
2. 調査成果の概要 .....	(宮崎)	11
3. まとめ .....	(宮崎)	13
IV. 多肥松林遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(溝渕)	14
2. 調査成果の概要 .....	(西村)	15
V. 多肥宮尻遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(佐々木)	25
2. 調査成果の概要 .....	(松本)	25
3. まとめ .....	(松本)	31
VI. 尾端遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(西村)	32
2. 調査成果の概要 .....	(西村)	33
3. まとめ .....	(西村)	36
VII. 住屋遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(喜岡)	40
2. 調査成果の概要 .....	(小野)	41
3. まとめ .....	(小野)	46
VIII. 原間遺跡		
1. 遺跡の立地と環境 .....	(小野)	49
2. 調査成果の概要 .....	(小野)	49
3. まとめ .....	(小野)	55

# 挿図目次

第1図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000) ……	2	第36図	調査区割図 ……	29・30
第2図	Ⅱ区SK02平・断面図 ……	4	第37図	遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/50,000) ……	32
第3図	Ⅱ区SD05断面図 ……	4	第38図	Ⅱd区遺構配置図 ……	35
第4図	Ⅱ区SD14断面図 ……	5	第39図	SD11・12・19土層断面図 ……	35
第5図	Ⅲ区SB06平・断面図 ……	6	第40図	出土土器実測図 ……	36
第6図	Ⅲ区SD01断面図 ……	6	第41図	尾端遺跡遺構配置図 ……	37・38
第7図	川津六反地遺跡遺構配置図 ……	7・8	第42図	尾端遺跡周辺条里型地割詳細図 ……	37・38
第8図	川津六反地遺跡調査区割図 ……	7・8	第43図	尾端遺跡内条里型地割推定図 ……	37・38
第9図	Ⅲ区SD05断面図 ……	9	第44図	尾端遺跡周辺条里型地割 (1/7,000) ……	39
第10図	川津六反地遺跡周辺条里地割想定図 ……	9	第45図	遺跡位置及び周辺遺跡 (1/25,000) ……	40
第11図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000) ……	10	第46図	SH11平・断面図 ……	41
第12図	遺構配置図 ……	11	第47図	SH11出土土器実測図 ……	41
第13図	SB9702平・断面図 ……	12	第48図	SH02平・断面図 ……	42
第14図	SB9701平・断面図 ……	12	第49図	SH02出土土器実測図 ……	42
第15図	遺構変遷図 ……	13	第50図	SH02カマド平・断面図 ……	43
第16図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000) ……	14	第51図	SH14平・断面図 ……	43
第17図	SH01平・断面図 ……	15	第52図	SH14出土土器実測図 ……	43
第18図	SD04・05断面図 ……	16	第53図	SH10平・断面図 ……	44
第19図	SD06・07断面図 ……	16	第54図	SH10出土土器実測図 ……	45
第20図	SR02下層遺構群配置図 ……	17	第55図	Ⅲ区SR01包含層出土帯金具 ……	46
第21図	SX03平・断面図 ……	17	第56図	Ⅲ区SX01出土滑石製紡錘車 ……	46
第22図	SR02・04土層断面図 ……	18	第57図	住屋遺跡遺構配置図 (上層) ……	47・48
第23図	出土土器実測図(1) ……	19	第58図	住屋遺跡遺構配置図 (下層) ……	47・48
第24図	SD03断面図 ……	20	第59図	SK04平・断面図 ……	49
第25図	出土土器実測図(2) ……	21	第60図	SK04出土遺物 ……	50
第26図	SB06平・断面図 ……	22	第61図	SK05平・断面図 ……	50
第27図	SB03平・断面図 ……	22	第62図	SK05出土遺物 ……	50
第28図	多肥松林遺跡遺構配置図 ……	23・24	第63図	SD01平・断面図 ……	51
第29図	多肥松林遺跡調査区配置図 ……	23・24	第64図	SD01出土遺物 ……	51
第30図	I区SR02土層図 ……	26	第65図	SK01平・断面図 ……	52
第31図	SR02出土遺物実測図 ……	26	第66図	SK01出土遺物 ……	52
第32図	I区SR01土層図 ……	27	第67図	原間遺跡遺構全体図 (上 上層 下 下層) ……	53・54
第33図	Ⅱ区SR03・SD05土層図 ……	28	第68図	Ⅵ区-②SD01出土縄文時代遺物 ……	53・54
第34図	SD05出土遺物実測図 ……	28	第69図	Ⅵ区-②SR02' 下層出土遺物 (2,4 杭上面 3,6 杭打設面 1,5 杭下層) ……	53・54
第35図	遺構配置図 ……	29・30			

## 写真目次

写真1	I区第1トレンチSR01土層(西より) ……	3	写真25	I区SR01木製品出土状況 ……	27
写真2	I区第2トレンチ遺物出土状況(北西より) ……	3	写真26	I区SR01木製品出土状況 ……	27
写真3	II区SK02(南西より) ……	4	写真27	II区SR01・03全景(東より) ……	29・30
写真4	III区全景(北東より) ……	5	写真28	I区SR01遺物出土状況(北より) ……	29・30
写真5	III区SB01(北東より) ……	5	写真29	III区西端部全景(南より) ……	31
写真6	III区SB06(北西より) ……	5	写真30	SB14・15全景(南より) ……	34
写真7	III区SD05(北西より) ……	6	写真31	SB16・17全景(南より) ……	34
写真8	III区SD01(南東より) ……	6	写真32	地割溝群全景(西より) ……	36
写真9	III区SD05出土瓦器碗 ……	9	写真33	SD12全景(東より) ……	36
写真10	VII-3区全景(東より) ……	10	写真34	I区SR01 ……	42
写真11	SB9702全景(東より) ……	13	写真35	SH02カマド部(南東より) ……	43
写真12	SB9701全景(東より) ……	13	写真36	SH14東壁際遺物出土状況 ……	44
写真13	SD06・07全景(北より) ……	16	写真37	SH14カマド部遺物出土状況 ……	44
写真14	SR01・02全景(東より) ……	16	写真38	SH10(南より) ……	45
写真15	SD14・15, SX02・03全景(南より) ……	19	写真39	帯金具 鉈尾(左)表(右)裏 ……	46
写真16	SX03全景(東より) ……	19	写真40	I区(上層)遺構全景 ……	47・48
写真17	SR03・04及び上層遺構群全景(西より) ……	20	写真41	II区(上層)遺構全景 ……	47・48
写真18	SD03・05全景(北より) ……	21	写真42	III区遺構全景 ……	47・48
写真19	SR03・04上層掘立柱建物群全景(西より) ……	21	写真43	SK04(上)・SK05(下) ……	50
写真20	SD16全景(北より) ……	21	写真44	SD01土層 ……	51
写真21	I区全景(西より) ……	25	写真45	SK01遺物出土状況 ……	52
写真22	III区全景(東より) ……	25	写真46	SR02' 下層杭検出状況(北より) ……	53・54
写真23	I区SR02全景(南東より) ……	26	写真47	VII区-②遺構検出状況 ……	55
写真24	I区SR01木製品出土状況 ……	27	写真48	SR02' 下層杭検出状況(西より) ……	55

## 表目次

表 1	多肥松林遺跡掘立柱建物一覧表 ……	22	表 2	尾端遺跡掘立柱建物一覧表 ……	34
-----	-------------------	----	-----	-----------------	----

## I. 調査の経緯と概要

平成9年度の県道事業及び河川改修事業の埋蔵文化財発掘調査は、平成9年4月1日に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと香川県教育委員会との間で締結した「埋蔵文化財調査契約書」にもとづき実施した。今年度の調査は、坂出市川津六反地遺跡、高松市兀塚遺跡、多肥松林遺跡、多肥宮尻遺跡、林下所遺跡、三木町尾端遺跡、大内町住屋遺跡、原間遺跡、楠谷C地区、高原地区、杖の端地区、白鳥町成重遺跡の9遺跡3地区で調査を実施した。当初計画と実施では、住屋遺跡で当初予想を上回る竪穴住居跡数により若干の工程変更があったが、概ね当初計画とおりに調査を実施することができた。

県道富熊宇多津線及び城山川改修事業に伴う川津六反地遺跡の調査は2,866㎡を調査対象として、平成9年10月より平成10年2月までの5ヶ月間で実施した。対象地の内訳は県道部分で2,198㎡、河川改修部分で668㎡を測る。この調査では弥生～古墳時代の溝状遺構、中・近世の集落の調査を実施した。

県道三木国分寺線に伴う兀塚遺跡の調査は、平成7年度からの継続調査で、今年度は当初家屋退去部分の371㎡を調査対象としたが、用地の問題で338㎡の調査に変更になった。調査は平成9年4月より5月までの2ヶ月間で実施した。この調査では古墳時代と鎌倉時代の2時期の集落の調査を実施した。

県道太田上町志度線に伴う多肥松林遺跡の調査は、7,000㎡を調査対象として、平成9年4月より12月までの9ヶ月間で実施した。調査は掘削及び仮設工事を業者に請負わせる工事請負方式で実施した。この調査では弥生～奈良時代の複数の自然河川、弥生時代の堰状遺構、古墳時代の溝状遺構、平安時代の掘立柱建物群等を検出した。

県道太田上町志度線に伴う多肥宮尻遺跡の調査は、4,000㎡を調査対象として、平成9年4月より9月までの6ヶ月間で実施した。この調査では弥生～古墳時代の複数の自然河川、古墳時代の溝状遺構、中世ピット群等を検出した。

県道高松長尾大内線に伴う尾端遺跡の調査は、昨年度からの継続調査で今年度が最後の調査になる。今年度は家屋退去部分の947㎡を調査対象として、平成10年1月より2月までの2ヶ月間で調査を実施した。この調査では7世紀に遡る条里型の溝群、7世紀代の掘立柱建物群等を検出し、小範囲ながら大変貴重な成果をあげることができた。

県道大内白鳥インター線に伴う住屋遺跡の調査は1,275㎡を調査対象として、平成8年4月より8月までの5ヶ月間で実施した。この調査では古墳時代の竪穴住居跡43棟、奈良時代の帯金具等を検出し、大変貴重な成果をあげることができた。

県道大内白鳥インター線（大内白鳥インターチェンジ北部）に伴う原間遺跡の調査は5,343㎡を調査対象として、平成8年9月より平成10年3月までの7ヶ月間で実施した。この調査では自然河川中から縄文時代後期頃の約120本の杭群を検出した。

その他、四国横断自動車の側道で県道となる次の3路線の調査を実施した。中徳三谷高松線については、横断道高松中央インター予定地の一部である林下所遺跡の調査を200㎡実施した。水主三本松線については楠谷C地区20㎡、高原地区11㎡、杖の端（西谷遺跡）地区438㎡を調査した。大内白鳥インター線については前述の住屋遺跡の他、原間遺跡856㎡、成重遺跡811㎡を調査した。

## Ⅱ. 川津六反地遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

川津六反地遺跡は、坂出市川津町六反地に所在する。地形的には大東川によって形成された沖積平野部分で、南に飯野山、北東に常山、東に城山がある。調査区の東では北流してきた大東川と西流してきた城山川が合流しており、本遺跡はこの両河川によって開析された段丘上に立地する。本遺跡及び周辺の標高は9 m前後で、東から西に緩やかに傾斜しており、明瞭な起伏はみられない。周辺地域には条里型地割の痕跡が比較的良好に残存する。

本遺跡の周辺には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が展開する。その多くは四国横断自動車道建設に伴い調査されている。川津東山田遺跡では遺構は伴わないものの旧石器時代の遺物が出土している。川津川西遺跡では縄文時代包含層が確認されており、周辺での集落の存在が想定できる。この遺跡からは古墳時代の竪穴住居と中世の掘立柱建物も検出されている。下川津遺跡では弥生時代前期及び終末期の遺構・遺物が多量に確認されている。川津一ノ又遺跡などで弥生時代中期の遺構が検出されたこともあわせ、弥生時代前期のころから、大東川流域に移動はあるものの集落が形成されていたと推定できる。川津二代取遺跡では、12世紀後半から13世紀前半にかけて集落が営まれていたことが確認されている。この遺跡で検出された掘立柱建物は、周辺の条里型地割に主軸の方向を規制されている。また、周辺の下川津、川津中塚、川津一ノ又、川津元結木等の諸遺跡でも中世の集落跡が検出されている。

なお川津六反地遺跡は、平成5年度に県教育委員会が大東川流域下水道管渠工事に伴って小規模な調査を実施し、弥生時代から中世にまたがる流路状遺構が報告されている。



- 1 川津六反地遺跡
- 2 川津二代取遺跡
- 3 川津下樋遺跡
- 4 川津中津遺跡
- 5 下川津遺跡
- 6 蓮尺茶臼山古墳
- 7 川津元結木遺跡
- 8 川津西又遺跡
- 9 川津一ノ又遺跡
- 10 川津東山田遺跡
- 11 川津川西遺跡
- 12 三ノ池古墳
- 13 飯野山山頂遺跡
- 14 川津向山古墳
- 15 常山城跡

第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

## 2. 調査成果の概要

調査対象地は、南西端の城山川河川改修部分と延長130mの県道予定地部分に分かれており、2,866m<sup>2</sup>を調査対象面積とする。前者をⅠ区、後者を西からⅡ区、Ⅲ区と調査工程の便宜上分割した。

Ⅰ区では、調査区に沿って流れている城山川の旧流路と思われる埋没河川を検出した。段丘上に立地しているⅡ区及びⅢ区では、ほぼ全域で耕作土直下が黄灰色粘質土または濁灰黄色砂質土の地山面で遺構検出面となることから、かなり大規模な削平が行われたことが窺える。Ⅱ・Ⅲ区の主たる検出遺構は、弥生時代後期及び古墳時代中期の溝状遺構、中世の掘立柱建物、柵列、柱穴群、土坑、溝状遺構、近世の柱穴群、土坑、溝状遺構等がある。

以下、調査区ごとに主な遺構について概略を述べる。

### (1) Ⅰ区

Ⅰ区は、調査対象地の南西端に位置する調査区で、面積は668m<sup>2</sup>である。段丘上のⅡ区及びⅢ区より比高差にして0.7~0.8mほど低い。Ⅰ区においては前述のとおり、城山川の旧流路と思われる埋没河川の一部（S R01）を検出した。第4トレンチで川岸と思われる落ち際のラインを検出したほかは、第1~第3トレンチでは地表から2mほど掘り下げたにも拘わらず、川幅及び川底を確認し得なかった。第4トレンチではほぼ東西方向に検出したことと他のトレンチでの堆積状況を考え合わせると、現在の流路の蛇行とは逆にⅠ区とⅡ区間の調査区外に蛇行していたことを窺わせる。

第1トレンチでは地表から1.2m下がった暗灰色粘質土層から17世紀後半~18世紀前半の肥前系陶磁器片が数点出土しており、少なくともこの時期以降でも上記の推定流路であった可能性が高い。また、第2トレンチでは、14世紀前半の羽釜3個体以上、小皿等の土師器が一括して廃棄されたと思われる状態で出土している。



写真1 Ⅰ区第1トレンチS R01土層（西から）



写真2 Ⅰ区第2トレンチ遺物出土状況（北西から）

### (2) Ⅱ区

Ⅱ区は、県道予定地部分のうち南西半分強の1,160m<sup>2</sup>を調査面積とする。段丘上の突端であり、現地表面の標高は8.9m前後を測る。概ね耕作土直下20~30cmで遺構検出面（地山面）となる。Ⅱ区からは弥生時代後期の溝状遺構、6世紀前半頃の溝状遺構、中世の溝状遺構及び掘立柱建物、柱穴群、近世の溝状遺構、掘立柱建物、柱穴群、土坑等を検出した。

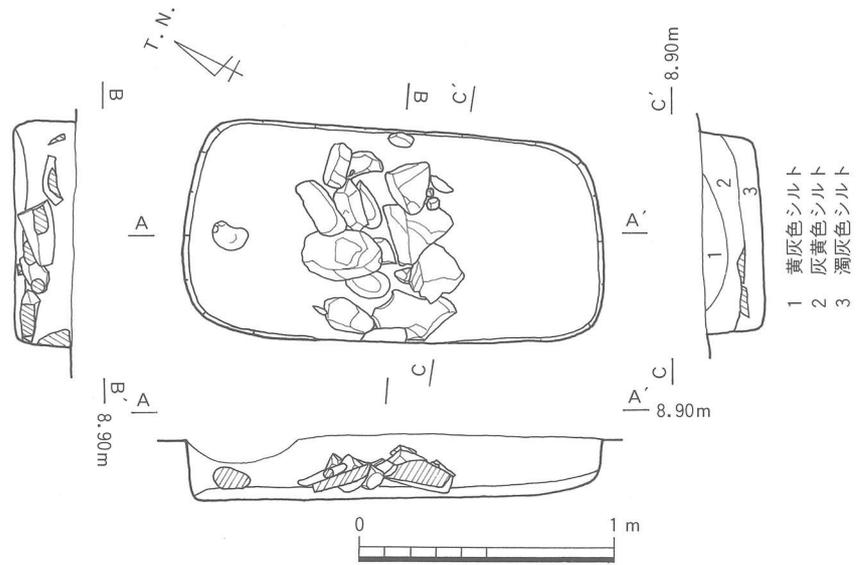
S K02 II区の南西寄り、後に述べるS D05を切った状況で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.67m、幅0.85m、深さ0.25mを測る。底面は平坦で、壁面は4面ともほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN22° Wにとる。中央部の埋土中位以下で、長径20~30cm大の塊石が集中して出土したが、意図的な石組みもしくはその崩壊した

ものとは思われない。石材は花崗岩・安山岩・砂岩・サヌカイトで、円礫・角礫等が混在する。砂岩のうち1点ややくぼんだ平坦面の一部に擦痕をもつものがみられる。遺物は土師器小皿片・土鍋体部片等に混じって、備前焼の坏、白磁の高台部を含む小片及び錆化・膨張の著しい不明鉄片2点が出土した。白磁片は復元底径約3cmで、碗もしくは小杯と思われる。

本遺構は形状から土壇墓の可能性も考えられるが、人骨や歯牙は検出できなかった。出土遺物の多くが細片であるため、年代の特定は困難であるが、概ね近世中葉の所産と推測する。

S D05 II区のほぼ東端から西端に向かって調査区の対角線状に縦断して流れる溝状遺構である。検出総延長は65mを測る。幅は0.6~1.5mと一定していないが、平均すると約1m前後である。深さは0.4~0.5mを測る。主軸方位はN77° Eにとる。断面形は幅の広いU字状もしくは水流によって抉られたためのフラスコ状を呈する。埋土は黒褐色~暗褐色系の粘質土・シルトを基本とする。遺物は壺・甕・高坏・鉢等の弥生土器、サヌカイト製スクレイパー・石鏃・石庖丁等が多量に出土した。弥生土器は、前期や中期後半から後期前半にかけてのも若干量含むが、その大半は後期後半であり、本遺構の機能していた時期と考えたい。

S D14 II区の北寄り、調査区に直交する状況で検出した溝状遺構である。検出延長は14m、幅3~3.8m、深さ0.6mを測る。主軸方向はN25° Wにとる。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄色粘



第2図 II区S K02平・断面図

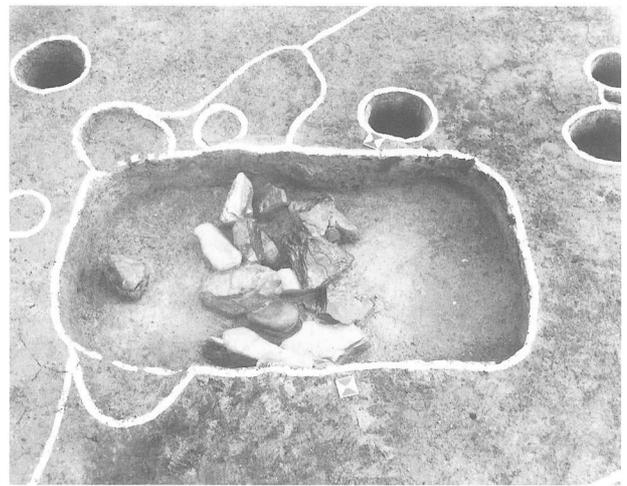
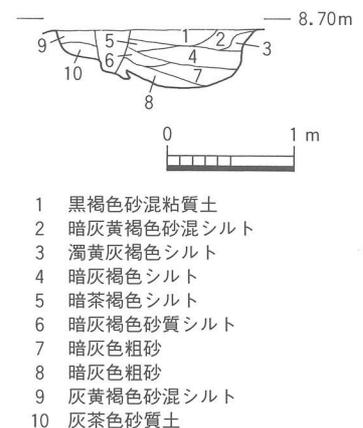
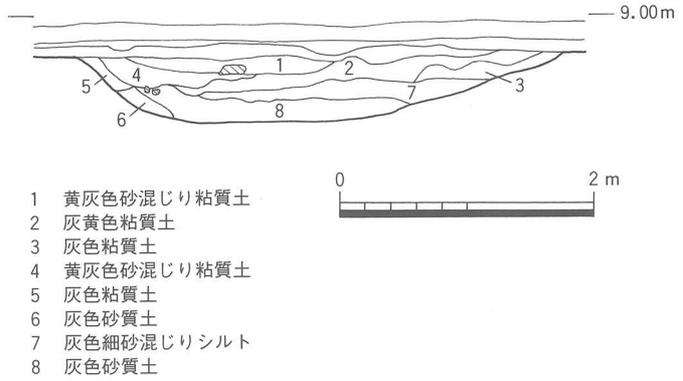


写真3 II区S K02 (南西から)



第3図 II区S D05断面図

質土及び灰色砂質土を主体とする。遺物は、土師器の羽釜・土鍋・摺鉢・坏・小皿，備前焼摺鉢・甕，肥前系を中心とした陶磁器等のほか，平瓦も多く出土した。また，上記の土器・陶磁器片を転用した円盤状土製品も10数点出土した。これらの遺物から，SD14は17世紀前半頃機能し，18世紀代に埋没し始めた遺構と考えられる。



第4図 II区SD14断面図

(2) III区

III区は県道予定部分のうち北東半分弱を占め，調査面積は1,038㎡である。調査前は水田及び休耕田であった。現地表面の標高は，9.3m前後を測る。II区同様に耕作土直下20~30㎡で遺構検出面（地山面）となる。検出した主な遺構には，弥生時代後期の溝状遺構，中世の掘立柱建物，柱穴群，溝状遺構，近世の掘立柱建物，柱穴群，土坑，溝状遺構等がある。



写真4 III区全景（北東から）

SB01 III区の南西寄りで検出した掘立柱建物である。桁行4間（8.2m）×梁間2間（4.2）m，面積34.4㎡を測る。主軸方位は，N30°Wにとる。柱穴の平面形は，円形と不整楕円形，掘り形の断面形は概ね長方形を呈する。深さは0.3~0.5mを測る。埋土は灰色砂混じりシルトである。土師器摺鉢・坏・小皿等の細片が出土している。時期の特定は困難であるが，中世後半14~15世紀の範囲でおさえられるものと思われる。柱穴列上及びその周辺には多数の柱穴があり，幾度かの建て替えが行われた可能性も考えられる。

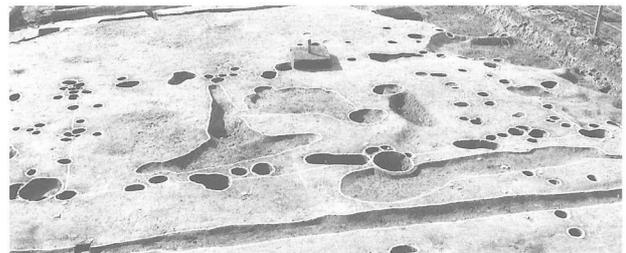


写真5 III区SB01（北東から）

SB06 III区の南辺で検出した掘立柱建物である。桁行2間（4.7m）×梁行1間（2.9m），検出面積13.6㎡を測る。南東面に0.9m幅の庇もしくは縁と思われる張り出し部分をもつ。主軸方位は，N64°Eを示す。柱穴の平面形は円形と長円形，掘り形の断面形は，長方形もしくは長方形に近い逆台形を呈する。深さは0.4~0.6mを測る。埋土は灰色砂混じりシルトである。土師器坏・小皿等の細

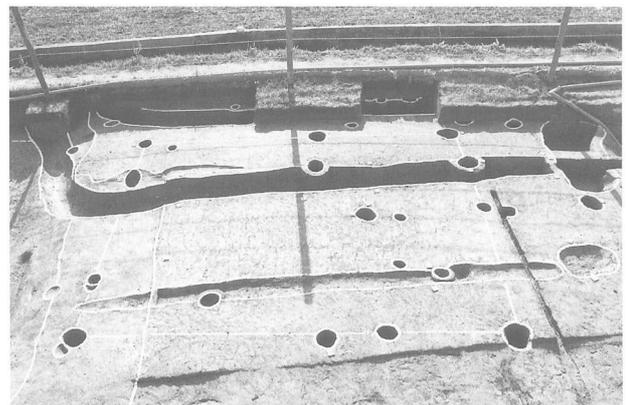
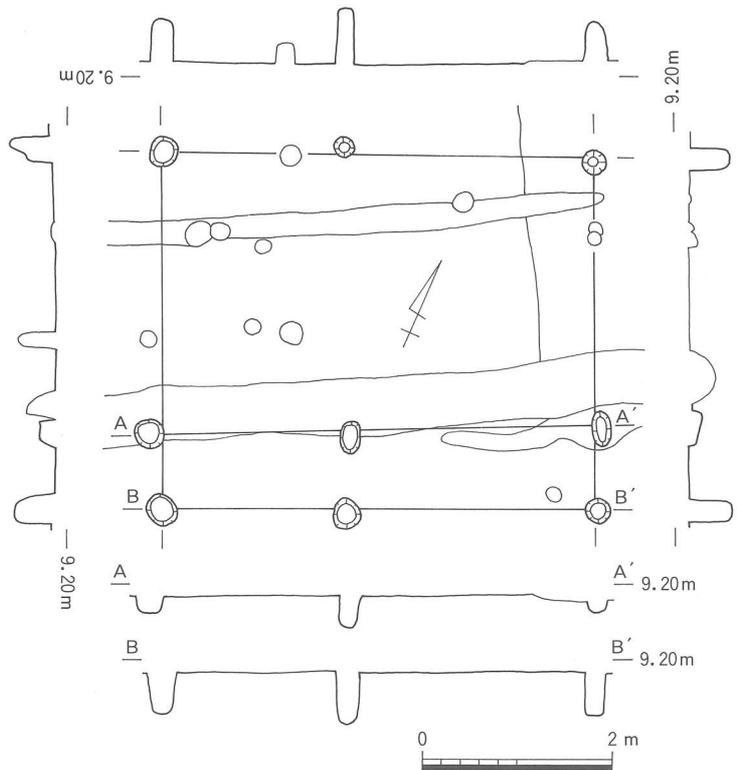


写真6 III区SB06（北西から）

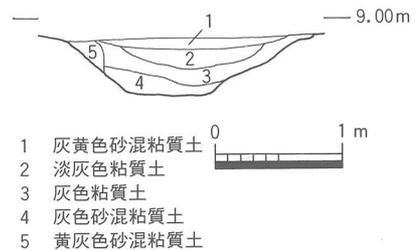
片が出土しており、14世紀頃の所産と考えられる。

SD01 Ⅲ区西端近くで、調査区を南東から北西に横断して流れる溝状遺構である。検出長13.7m、幅1.9~2.1m、深さ0.95mを測る。主軸方位はN33°Wにとる。断面形は、上部が大きく開くU字形を呈する。埋土は灰色粘質土を主体とする。下層から土師器羽釜、土鍋等が出土している。14世紀前半に機能していたものと推定できる。なお、本遺構の両岸において不整長円形・不整楕円形の土坑を検出した。これらは、SD01の検出面最上層下に被覆されていることから、SD01と関連のある遺構と思われる。



第5図 Ⅲ区S B06平・断面図

SD05 SD01から約8m北東にほぼ並行して、同様に南東から北西に流れる溝状遺構である。検出長14m、幅1.8~2.2m、深さ0.6mを測る。主軸方位はN34°Wにとる。断面形は、上部が大きく開く逆台形を呈する。上層は灰褐色砂混じりシルト、下層は暗灰色砂混じり粘質土の埋土をもつ。溝底面直上から、12世紀後半の和泉型瓦器椀がほぼ完形のものも含めて4個体以上出土していることから、この時期に機能していたと考えられる。他に亀山焼甕・土師器椀・坏・小皿等が出土している。



- 1 灰黄色砂混粘質土
- 2 淡灰色粘質土
- 3 灰色粘質土
- 4 灰色砂混粘質土
- 5 黄灰色砂混粘質土

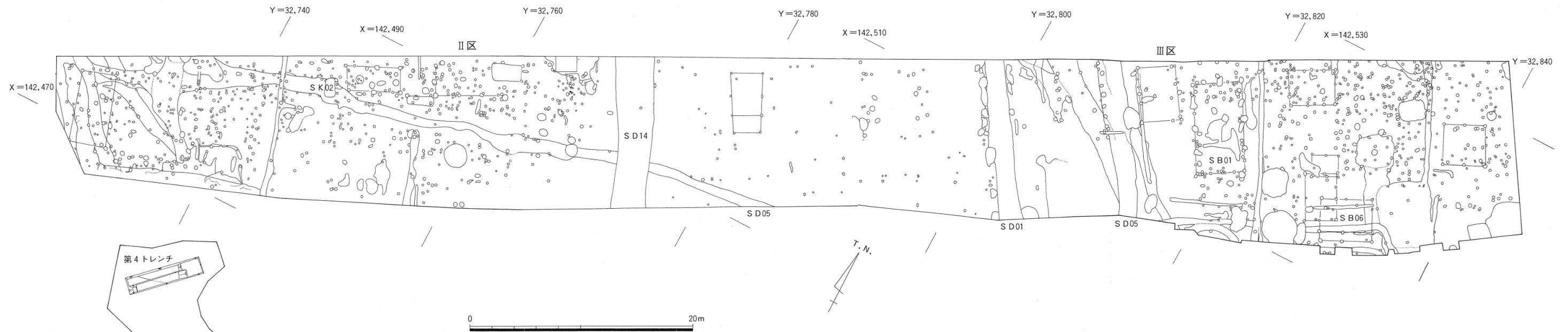
第6図 Ⅲ区SD01断面図



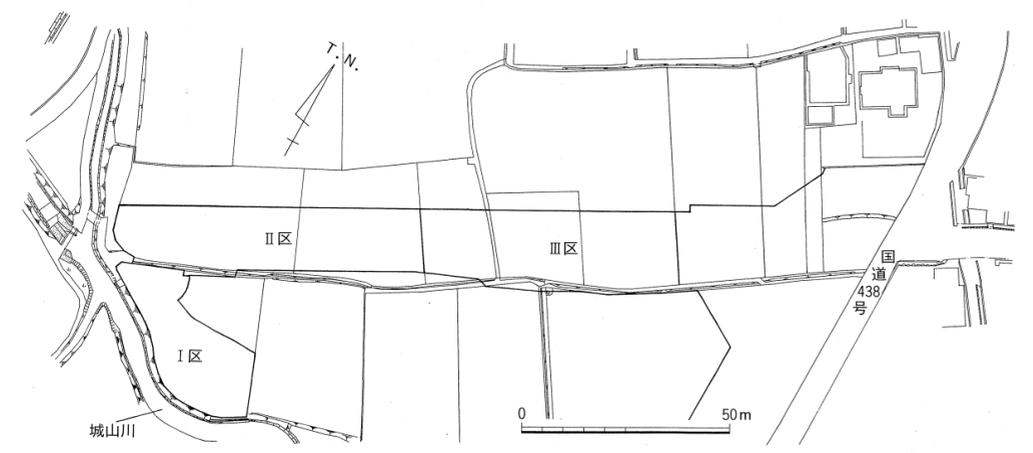
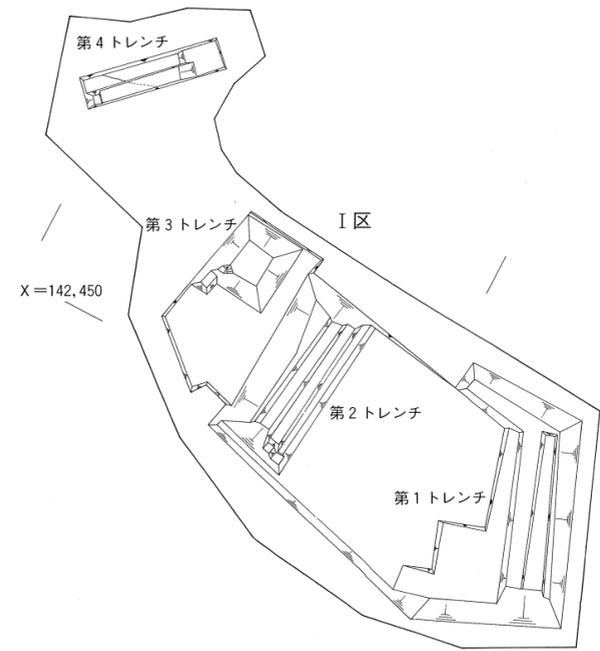
写真7 Ⅲ区SD05 (北西から)



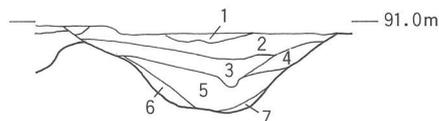
写真8 Ⅲ区SD01 (南東から)



第7図 川津六反地遺跡遺構配置図



第8図 川津六反地遺跡調査区割図



- 1 濁灰黄色シルト
- 2 灰黄色シルト
- 3 灰褐色砂混シルト
- 4 灰褐色砂質シルト
- 5 暗灰色砂混粘質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 暗灰黄色砂混シルト



第9図 Ⅲ区S D 05断面図



写真9 Ⅲ区S D 05出土瓦器椀

### 3. まとめ

川津六反地遺跡の調査においては、弥生時代後期、中世及び近世を中心とする数多くの遺構を同一面で検出することができた。

I区においては、大東川の支流域山川の、中世から近世にかけての旧流路の一部を検出した。なかでも中世の堆積層からは、14世紀頃の日常生活雑器が廃棄された状態で出土した。

Ⅱ区及びⅢ区では、弥生時代・古墳時代・中世・近世の各種遺構を検出した。弥生時代の溝状遺構は5条を数えるが、やや先行する流路があるものの、大半が後期後半の所産である。Ⅱ区S D 05の西端で6世紀前半の溝状遺構と交差している。弥生時代と古墳時代の遺構は、溝状遺構の他には全く検出できず、後世の削平を考慮しても、今回の調査区付近は集落域から外れているものと考えられる。

本遺跡の中心を占めるのは中世の諸遺構である。遺構ごとの出土遺物の十分な検討ができていないため概観を述べるにとどめるが、丸亀平野の条里型地割にほぼ合致したⅢ区S D 05が12世紀後半であるほかは、西側に並行するⅢ区のS D 01をはじめとして何棟かの掘立柱建物を含む夥しい数の柱穴群の大半が、14世紀～15世紀に属する。なお、調査区南辺に沿う農道も坪界線に合致することから、S D 05の延長線が坪界線の交点になる可能性が高い。また、柱穴群の分布状況を見ると、Ⅲ区S D 05から北東とⅡ区の南西端に分かれ、間に当該期の遺構は殆どみられない。この時期の条里型地割内における土地利用のあり方を知る上での資料的価値をもつ。

また、中世遺構が疎らであったⅡ区の中央部に所在する掘立柱建物及び柱穴群とS D 04は17～18世紀の遺構であり、Ⅲ区にも近世遺構が若干混じることから、近世における当地の村落の状況を検討する上での一資料になると考えられる。

今後は、既に数多く実施された川津地区における発掘調査の成果を踏まえて、本遺跡の変遷を検討する必要があるだろう。



第10図 川津六反地遺跡周辺条里地割想定図

### Ⅲ. 兀塚遺跡

#### 1. 遺跡の立地と環境

兀塚遺跡は、高松平野の西辺部にあたる高松市檀紙町兀塚と円座町佐古・川向にまたがって広がる遺跡である。遺跡の西部には古川が蛇行しながら北流し、さらに西方には堂山・六ツ目山・伽藍山などの山塊が位置している。東方には香東川が流れており、その東には高松平野の中心部が広がりを見せている。遺跡の周辺はため池の点在するのどかな田園風景が展開している。当該地の標高は若干の起伏が認められるものの約30mで、周辺には一町方格の条里型の地割がみられる。

当該地周辺には旧石器時代から近世に至る幅広い時代の遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡としては正箱遺跡や中間西井坪遺跡などがある。中間西井坪遺跡ではA T火山灰層上位から船底形・小型ナイフ形石器を主体とする良好なブロックを検出している。縄文時代では国分寺六ツ目遺跡で、石器製作跡と思われる約60点を数える大型剥片が折り重なっていたサヌカイト集石遺構が検出されている。弥生時代になると遺跡の数は増加する。正箱遺跡では弥生時代後期の円形竪穴住居跡が検出されている。古墳時代に入ると多数の古墳が周辺に築造されている。国分寺六ツ目古墳は4世紀頃の小規模な前方後円墳であるが、後円部に竪穴式石槨・粘土槨・箱式石棺の3種類の埋葬施設を有している。御厩天神社古墳も前方後円墳で、採集された円筒埴輪から5世紀中頃の築造が想定されている。この他に、堂山・六ツ目山の斜面には多数の円墳が分布している。その中の本堯寺北1号墳は小規模な竪穴式石槨の内部から円筒埴輪棺が出土している。三ツ塚古墳や御厩大塚古墳などは横穴式石室を有している。また、中間西井坪遺跡で4世紀末から5世紀初頭の埴輪や陶棺などを焼成した大型土坑や、付随する竪穴住居跡及び円筒埴輪を有する小円墳3基が検出されている。古代の遺跡では正箱遺跡で奈良時代から平安時代の大型の掘立柱建物を含んだ建物群が検出されている。中世以降では、国分寺楠井遺跡で室町時代の土師質および瓦質の土器を生産した窯跡があり、薬王寺遺跡などでは小規模な集落跡が検出されている。その他に当該地周辺には多数の「塚」が所在するがその時代や内容はほとんどのものが不明である。



- |            |              |
|------------|--------------|
| 1 兀塚遺跡     | 17 西山崎 2号墳   |
| 2 正箱薬王寺遺跡  | 18 西山崎 3号墳   |
| 3 中森 2号墳   | 19 西山崎 4号墳   |
| 4 中森古墳     | 20 北岡城跡      |
| 5 中間東井坪遺跡  | 21 本堯寺北 1号墳  |
| 6 中間西井坪遺跡  | 22 本堯寺北 2号墳  |
| 7 三ツ塚古墳    | 23 本堯寺西古墳    |
| 8 御厩天神社古墳  | 24 弓塚下古墳     |
| 9 御厩池古墳    | 25 堂山城跡      |
| 10 山王神社古墳  | 26 矢塚南古墳     |
| 11 伽藍山東麓古墳 | 27 矢塚北古墳     |
| 12 うたい塚古墳  | 28 国分寺六ツ目山遺跡 |
| 13 万灯塚 1号墳 | 29 国分寺六ツ目山古墳 |
| 14 馬塚      | 30 国分寺楠井遺跡   |
| 15 犬のくそ塚   | 31 おま泉遺跡     |
| 16 西山崎 1号墳 | 32 国分寺下日名代遺跡 |

第11図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/25,000)

## 2. 調査成果の概要

県道三木国分寺線地方特定道路整備事業に伴う元塚遺跡の調査は、平成7年度からの継続調査で、平成9年度は家屋退去部分等の371m<sup>2</sup>を調査対象として、平成9年4・5月の2ヶ月間で実施した。なお、当初の対象面積371m<sup>2</sup>のうち一部に関しては期間内に用地取得等の条件整備が整わなかったため、調査面積は338m<sup>2</sup>となった。今回の調査も平成7年度以降の地区・グリッドの設定を踏襲して調査を行った。その結果、Ⅶ-3区では古墳時代、鎌倉時代の二時期の遺構・遺物を検出した。

### (1) 古墳時代

当該期の遺構は、概ね調査区の北東部を中心に展開している。主な遺構として掘立柱建物2棟、溝状遺構1条、土坑・柱穴数基を検出した。

掘立柱建物S B9702は2間(3.6m)×2間(3.0m)のいびつな正方形をしており、主軸方向はN33°Wを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、中には柱痕の残るものも認められる。須恵器杯身の細片等が出土している。もう1棟の掘立柱建物S B9703は、東半部が調査区外の水路によって壊されているが、2間(3.3m)×3間(4.6m)の長方形を呈するものと思われる。建物の内部にも柱穴がみられることから、総柱構造を呈していた可能性もある。主軸方向はN10°Wを測る。柱穴掘り方は基本的に隅丸方形で、柱を安定させる目的で拳大の塊石を入れているものも認められる。これら2棟の掘立柱建物は約20°ほど主軸方向を違えているものの、比較的大きな柱穴掘り方を有している点が共通している。この2棟の建物の時期は、出土した須恵器などの破片からみて6世紀末

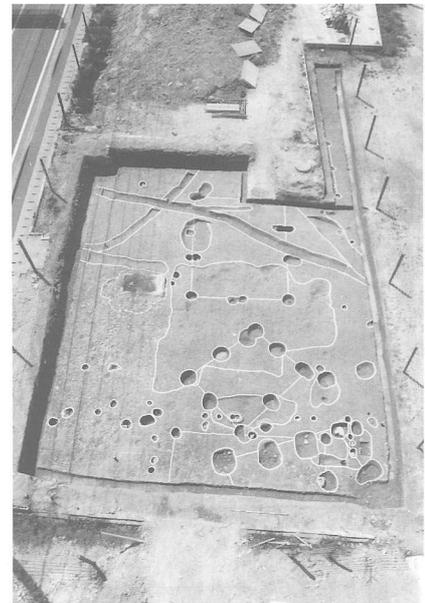
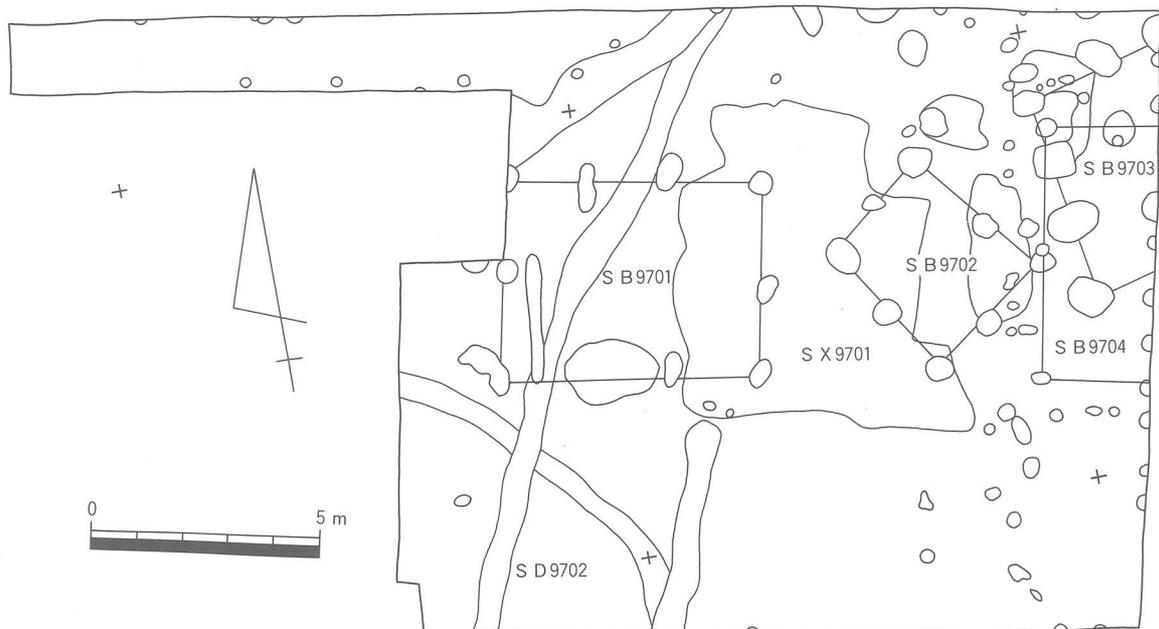


写真10 Ⅶ-3区全景(東より)



第12図 遺構配置図

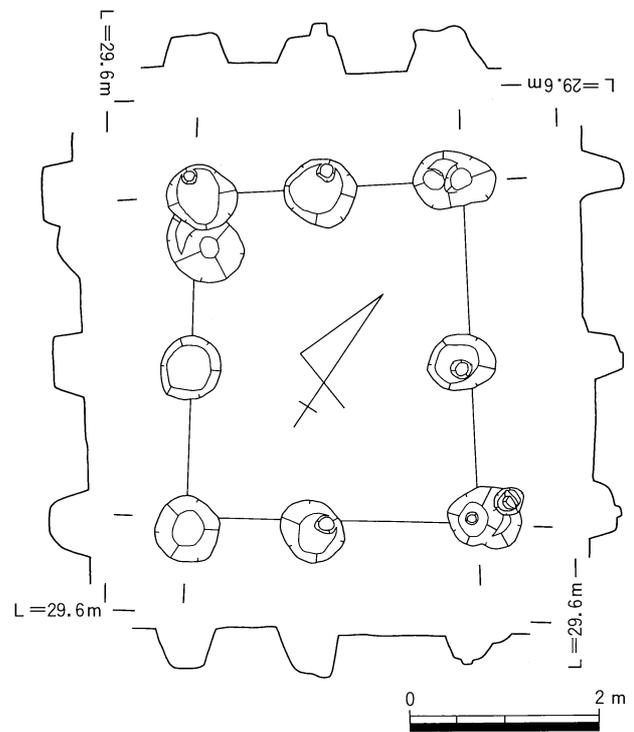
から7世紀初頭に属するものである。これらの建物の北側には数基の柱穴が存在していることから、調査区外に建物が展開していることが想定される。溝状遺構S D9702は、調査区のほぼ中央を緩やかに弧を描きながら北流している。中からは6世紀末頃の高杯・杯蓋等が出土している。

(2) 鎌倉時代

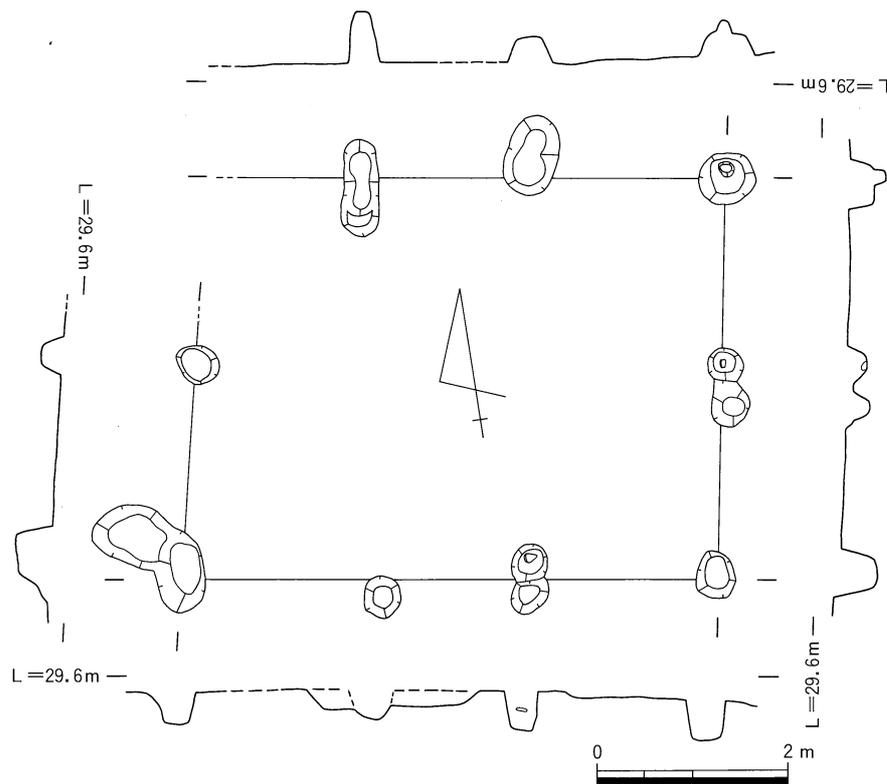
当該期の遺構は、調査区ほぼ全体に展開を見せる。主な遺構として掘立柱建物2棟、溝状遺構3条、土坑数基の他に多数の柱穴を検出している。

掘立柱建物S B9701は2間(4.6m) × 3間(5.7m)の東西棟で、主軸方向はN81°Wを測る。もう1棟の掘立柱建物S B9704は昨年度調査したVII-2区の掘立柱建物に連続するもので、主軸方向をN79°W

にとる2間(5.5m) × 3間(8.4m)の東西棟である。いずれも柱穴掘り方は円形で、鎌倉時代の土師器小皿の破片などがわずかに出土している。調査区北西で検出した柱穴の列は、調査区北方にのびる掘



第13図 S B9702平・断面図



第14図 S B9701平・断面図

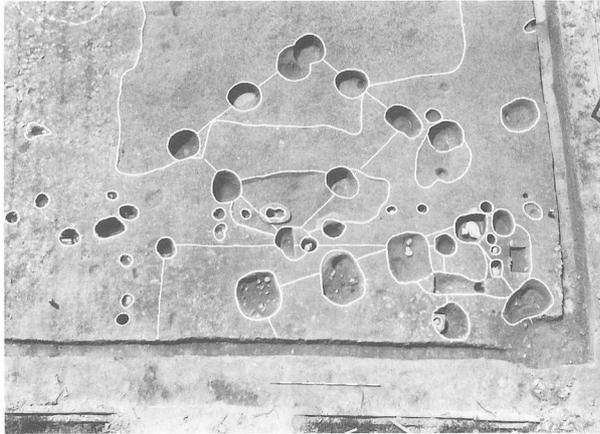


写真11 S B 9702全景 (東より)

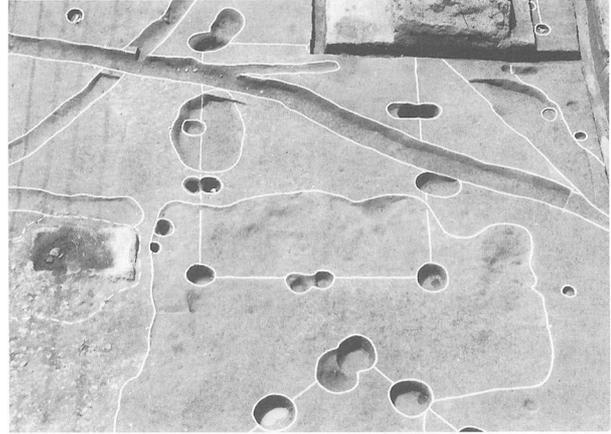


写真12 S B 9701全景 (東より)

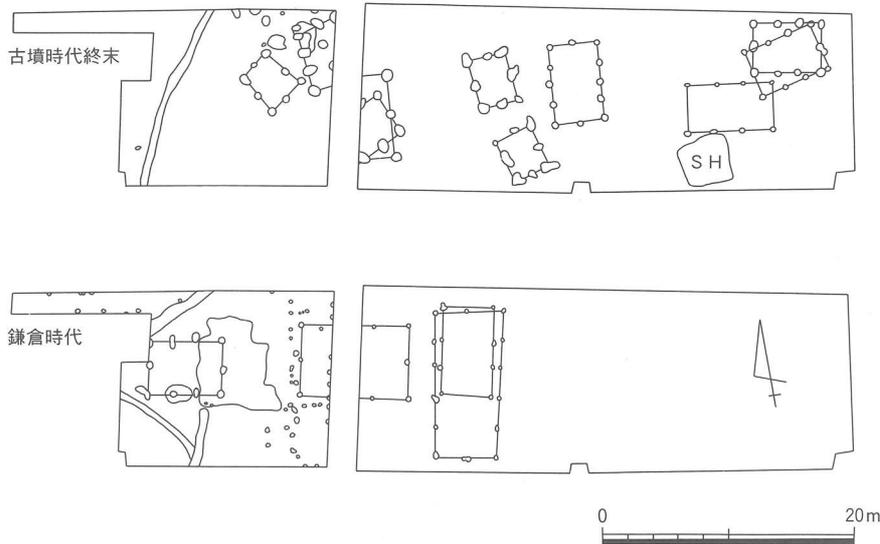
立柱建物の一部になる可能性がある。その他の溝状遺構は土器細片しか出土していないが、埋土が類似していることから当該期のものと判断した。また、調査区東半で検出した多数の柱穴のなかで埋土が黄灰色系のもは江戸時代の可能性もある。なお、掘立柱建物S B 9701は大きな不定形の土坑S X 9701によって東半を埋められていることから、鎌倉時代の中でも若干の時期差が存在することがわかる。

### 3. まとめ

本年度の調査区は、巨視的には西方へ傾斜する地形でⅦ-1・2区を中心とした微高地の縁辺部にあたり、古墳時代・鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。

昨年度の調査で検出された古墳時代の集落が、さらに西方に広がっていることが確認できた。この集落は掘立柱建物と竪穴住居で構成されており、建物の主軸方向から3つ程度のグループに分けることができるようである。更なる詳細な遺物の検討からの時期決定が必要となろう。本年度の調査で検出した溝状遺構S D 9702は、この集落の西辺を示す目的を持って掘られたものと思われる。

鎌倉時代の掘立柱建物の主軸方向が、遺跡周辺にみられる方格地割の方向とほぼ同一方位を測ること



第15図 遺構変遷図

から、既にこの時代には条里型地割が施行されていたことがうかがえる。この段階になるとⅦ-4区の低地は埋没が進んでほぼ平坦な様相を呈していたと思われるが、建物などは検出されていない。

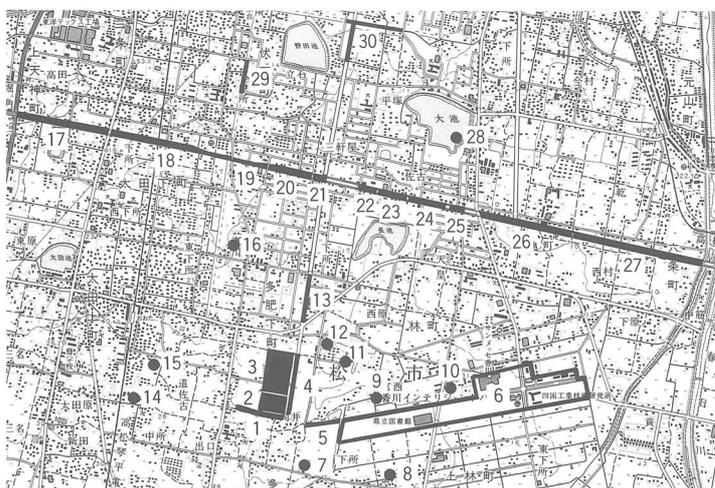
宅地撤去後の小さな面積での調査ではあるが、集落の西端を確認する等の成果を上げることができた。

## IV. 多肥松林遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

多肥松林遺跡は高松平野南寄りの多肥上町に所在し、地形的には香東川の扇状地上に位置している。周辺域に残存する方格地割は天平7年に描かれた「弘福寺領讃岐国山田郡田図」に比定されている。

多肥松林遺跡としては、すでに平成5・6年度に高校新設事業に伴う調査が、平成6年度には高松土木事務所新設事業に伴う調査が実施されており、今回が第4次の調査となる。またこれら多肥松林遺跡の東側には日暮・松林遺跡が隣接し、そのすぐ東には多肥宮尻遺跡があるのを始め、さらに東側では空港跡地整備事業に伴う調査が、北側では高松東道路建設に伴う調査が近年実施されたため周辺の遺跡はかなりの数に上る。その中でも空港跡地遺跡はとりわけ広大な調査面積を誇り、弥生時代から近世までの遺跡を網羅し、多くの知見を提供している。弥生時代の遺跡の調査例は最も多く、代表的な集落跡としては上天神遺跡、浴・長池Ⅰ遺跡、六条・上所遺跡、凹原遺跡、多肥松林遺跡（新設高校）、日暮・松林遺跡、空港跡地遺跡等が挙げられる。墳墓の調査例としては蛙股遺跡（土器棺墓）、林・坊城遺跡（円形周溝墓状遺構）、凹原遺跡（土器棺墓）、日暮・松林遺跡（方形周溝墓）、浴・長池Ⅰ遺跡（円形周溝墓）がある。なおこの浴・長池Ⅰ遺跡と浴・長池Ⅱ遺跡からは小区画の水田が検出されている点でも注目される。また重要な遺物としては居石遺跡出土の3面の小型仿製鏡、井手東Ⅰ遺跡出土の木製品（鋤、鋏、琴、弓等）、多肥松林遺跡（新設高校）出土の木製品（鳥形・剣形祭祀具、農具、建築材）等が挙げられる。古墳時代の遺跡としては石清尾山古墳群を始めとする古墳が数多く知られているが、集落遺跡としては調査例が少ない。集落跡が検出されたものとしては空港跡地遺跡、太田下・須川遺跡、六条・上所遺跡等があるが、中でも六条・上所遺跡の古墳時代中期の竪穴住居跡からは韓式系土器が出土しており、この地域の文化交流の様子を考える上で興味深い。また空港跡地遺跡出土の人形土製品は偶像における性器表現の最古の事例と考えられ、全国的にも貴重な資料となっている。古代の遺跡としては林・坊城遺跡、空港跡地遺跡等から集落跡が検出された。注目すべき遺物としては多肥松林遺跡（高松土木）出土の平安中期から後期にかけての24点の墨書土器がある。中世の遺跡の調査例は少ないが、集落跡が検出されたものとしては林・坊城遺跡、空港跡地遺跡、六条・上所遺跡等があり、特に空港跡地遺跡からは鎌倉時代の区画溝を伴う屋敷地が検出されている。



- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1 多肥松林遺跡       | 16 多肥下遺跡    |
| 2 多肥松林遺跡（高松土木） | 17 上天神遺跡    |
| 3 多肥松林遺跡（新設高校） | 18 太田下・須川遺跡 |
| 4 日暮・松林遺跡      | 19 蛙股遺跡     |
| 5 多肥宮尻遺跡       | 20 居石遺跡     |
| 6 空港跡地遺跡       | 21 井手東Ⅱ遺跡   |
| 7 桜木神社南方散布地    | 22 井手東Ⅰ遺跡   |
| 8 拝師廃寺         | 23 浴・長池Ⅱ遺跡  |
| 9 宮西・一角遺跡      | 24 浴・長池Ⅰ遺跡  |
| 10 一角遺跡        | 25 浴・松ノ木遺跡  |
| 11 池ノ内遺跡Ⅱ      | 26 林・坊城遺跡   |
| 12 下池遺跡        | 27 六条・上所遺跡  |
| 13 凹原遺跡        | 28 大池遺跡     |
| 14 多肥廃寺        | 29 キモンド一遺跡  |
| 15 北原遺跡        | 30 松縄下所遺跡   |

第16図 遺跡の位置及び周辺の遺跡（1/50,000）

## 2. 調査成果の概要

本年度の多肥松林遺跡の調査対象地は県立高松桜井高校の南約100mに位置する、県道太田上町志度線の予定地内である。調査地は東西延長290m面積7,000m<sup>2</sup>を測る。調査区の設定は西よりⅠ～Ⅳ区に4区分して調査を実施した。調査地の地目は全て水田である。

本年度の調査地の地形的特徴は、4条の自然河川と河川に挟まれた複数の微高地よりなる。微高地上面は顕著な削平を受けており耕作土直下で遺構面を検出した。微高地及び河川上面からは ①弥生時代後期末 ②古墳時代後期 ③平安時代後半 ④鎌倉時代末 ⑤江戸時代以降等の数時期の遺構を検出した。これらの遺構の中で住居を伴い集落を営んでいるのが、弥生時代と平安時代後半の段階である。なお、平安時代後半以降の段階には当地に条里型の地割が導入されたようで、坪界線の溝、地割方向に主軸を揃えた建物群等を検出した。

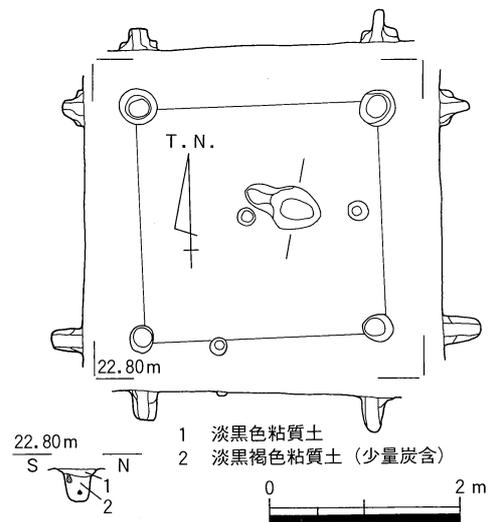
本年度の調査で検出した自然河川は、巨視的に見て旧香東川の一支流と考えられる。検出した自然河川は、個別の河川で差はあるが、大まかには弥生時代中期より湿地状を呈し、平安時代前半には完全に埋まり、平安時代後半以降にはその上面に集落が展開する。なお、SR02下層からは、弥生時代後期の小規模な堰状遺構及び堰状遺構に伴う水溜状遺構等を検出している。また、今回の調査で遺構は検出できなかったが、SR02の上層より奈良時代の遺物が多量に出土している。出土遺物の中には第23図14の円面硯等注目できる遺物も含まれる点より、調査地周辺に有力首長の所在する集落の存在が伺える。

### (1) 弥生時代中期～古墳時代前期

当該期の遺構はⅣ区の竪穴住居跡1棟とⅠ・Ⅱ区の複数の溝状遺構、Ⅱ～Ⅳ区の自然河川4条及び自然河川(SR02)の下層で検出した堰状遺構(SX01・02)とそれに伴う水溜状遺構(SX03)等の諸遺構である。主要な遺構を挙げればSH01, SD03・04・06・07・14・15, SR01～04, SX01～04等である。傾向として、自然河川からの遺物は比較的豊富なのであるが集落を構成する遺構は少ない。そのため集落の中心は、Ⅱ・Ⅲ区周辺域の微高地に展開しているものと考えられる。

SH01 Ⅳ区南西部の微高地で検出した。住居はかなり削平を受けていて、主柱穴と炉跡のみ検出できた。そのため詳細な規模等不明な点が多い。主柱穴は4主柱穴検出した。径約0.4m深さ約0.4mを測る。埋土は淡黒褐色粘土である。主柱穴間の柱間は約2.5mを測る。炉跡は不整円形状で、長径0.8m, 短径0.5m, 深さ0.3mを測る。埋土は上・下2層に区分でき、下層中より少量炭片を検出した。出土遺物としては炉跡中より弥生土器の細片を少量出土したのみである。そのため詳細な時期については問題を残す。

SD04 Ⅰ区SD03に隣接しSD05に切られる形で検出した、南北方向に延びる溝である。検出長26.0m, 幅1.4m, 深さ0.4mを測る。主軸方位はN25°Eを測る。断面幅広なU字状を呈し埋土は約5層に細分できる。出土遺物は弥生時代後期末の資料が主体を占める。主要な遺物としては弥生土器壺・甕



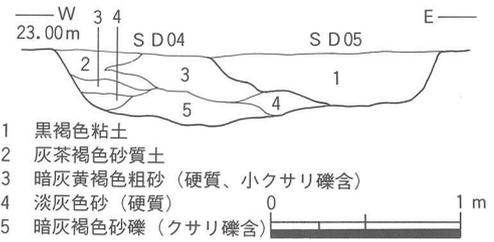
第17図 SH01平・断面図

・鉢，石器類等がある。性格的には灌漑水路の可能性が高い。

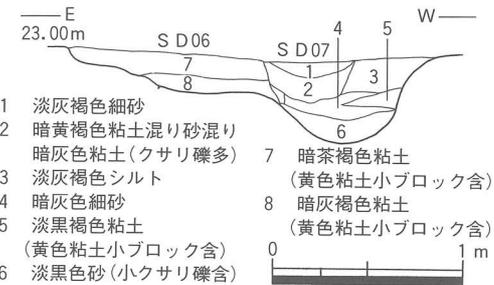
S D07 I区S D04の東でS D06に切られる形で検出した，北東方向に延びる溝である。検出長22.0m，幅1.0m，深さ0.4mを測る。主軸方位はN47° Eを測る。断面U字状を呈し埋土は約6層に細分できる。出土遺物は少ない。傾向として少量弥生時代中期の資料を含むが，弥生時代後期末の資料が主体を占める。主要な遺物としては弥生土器甕，石器類等がある。性格的には灌漑水路の可能性が高い。

S R01 東西方向に延びる大型の河川S R02が，II区の西部で北へ向きを変える。その屈曲部に南より短く合流するのがS R01である。調査区内で極一部を捉えただけで不明な点が多いが，検出長5.0m，幅12.0m，深さ0.7mを測る。断面浅い皿状を呈し埋土は大別して3層に区分できる。埋土の状況はS R02の埋土と酷似し，埋没過程はS R02と同歩調をとるものと考えられる。最下層の6層は細砂中にシルトがラミナ状に堆積する弥生後期前半の洪水砂で，S R01・02の合流部で広範囲に広がる。

S R02 III区東半部よりII区に向けて，東西方向に延びる大型の河川である。II区の西部で北へ向きを変える。その屈曲部に南よりS R01が合流する。検出長120.0m，幅15.0m，深さ0.7mを測る。断面浅い皿状を呈し埋土は大別して1～6層に区分できる。1・2層は暗灰紫色系の粘土で，細分すれば1①～1②層，2①～2③層に分けられる。堆積範囲はS R02の全域に広がっている。層厚は約0.4mを測る。出土遺物としては弥生時代～奈良時代迄の遺物を多量に包含する。なお，1層上面は平安時代以降の遺構が展開する。3層は黒色系の粘土で，細分すれば3①～3②層に分けられる。堆積範囲はS R02の全域に広がっている。層厚は東西でかなり差があり，東のIII区で約0.5m，西のII区で約0.2mを測る。出土遺物としては弥生時代後期後半～古墳時代前期迄の遺物を包含する。4層は淡黒色系のシルトで，細分すれば4①～4③層に分けられる。堆積範囲はS R02の西半部に広がる。層厚は約0.2mを測る。



第18図 S D04・05断面図



第19図 S D06・07断面図

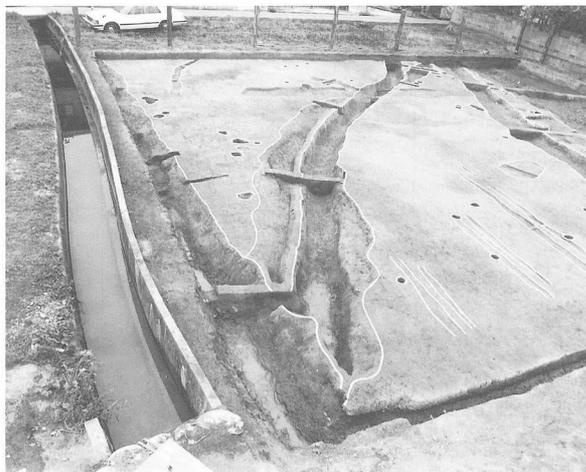
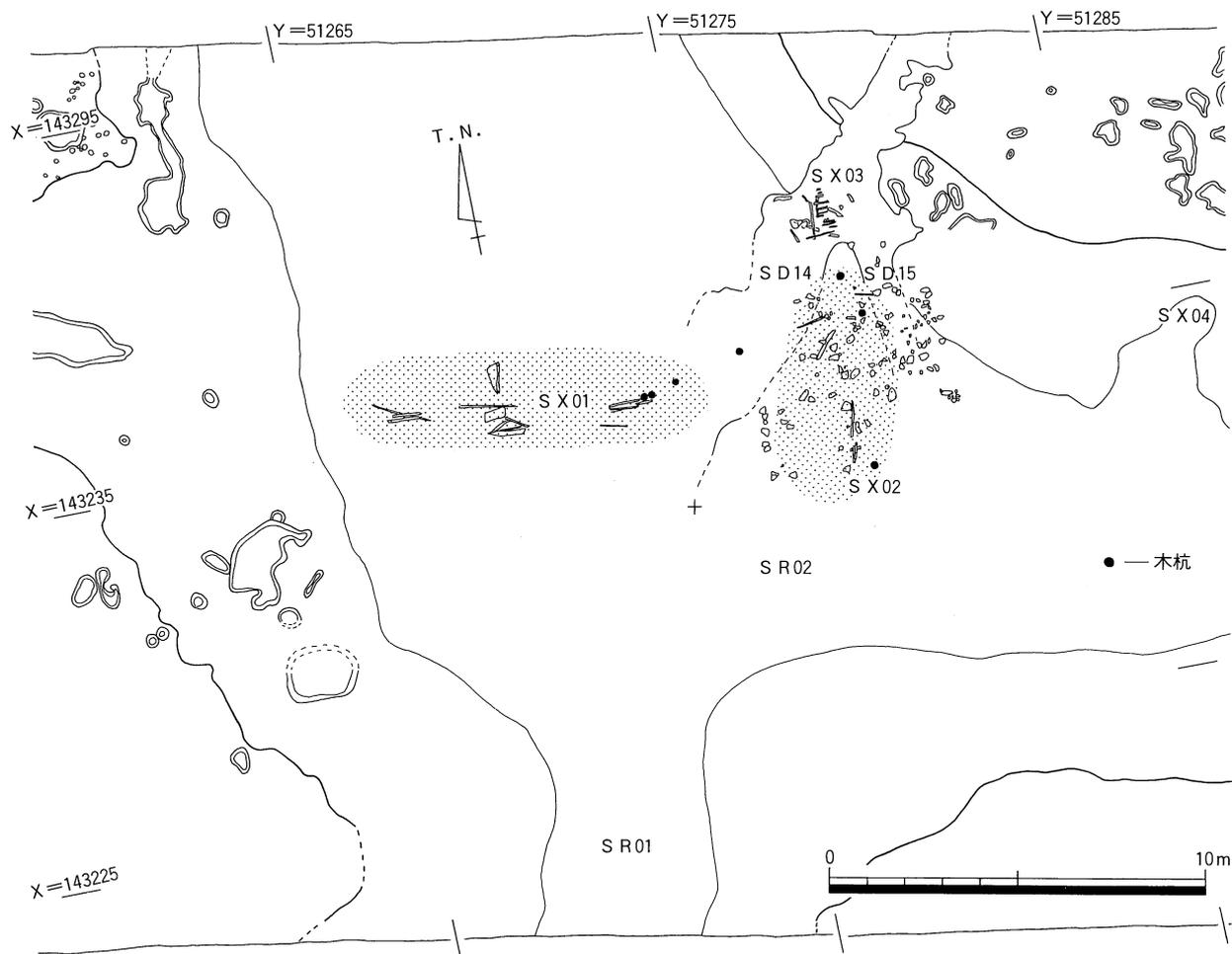


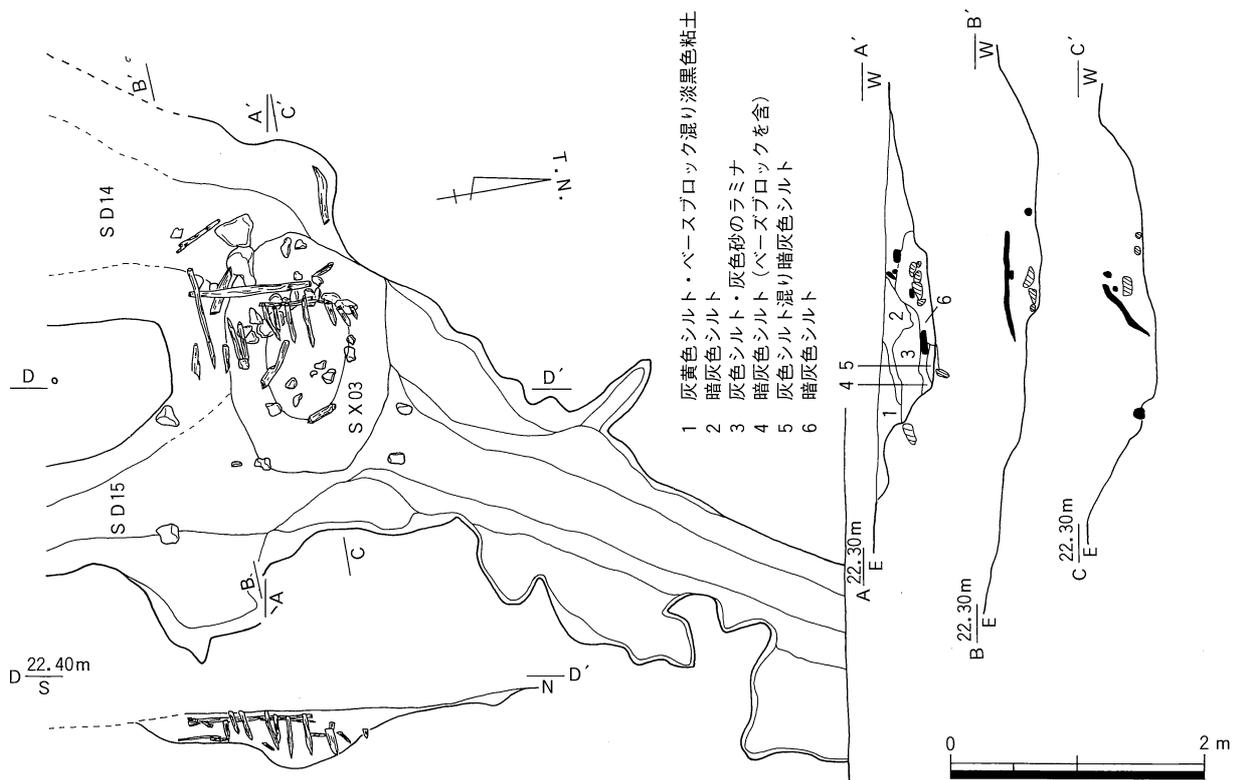
写真13 S D06・07全景（北より）



写真14 S R01・02全景（東より）



第20図 S R02下層遺構群配置図



第21図 S X03平・断面図

出土遺物としては弥生時代中期後半の遺物を包含する。5層は黄色粘土の小ブロックを多量に包含する黒色粘土層でSR02の北岸部のほぼ全域に堆積している。層厚は約0.3mを測る。6層は細砂の中に灰色シルトがラミナ状に堆積するSR01からの洪水砂で、細分すれば6①～6④層に分けられる。堆積範囲はSR01・02の合流部でSR01方向からSR02の西端部へ「ハ」の字状に広範囲に拡がる。層厚は約0.3mを測る。出土遺物としては弥生時代前期～後期中葉の遺物を包含する。なお、6層上面からは2時期の小規模な堰状遺構を検出した。

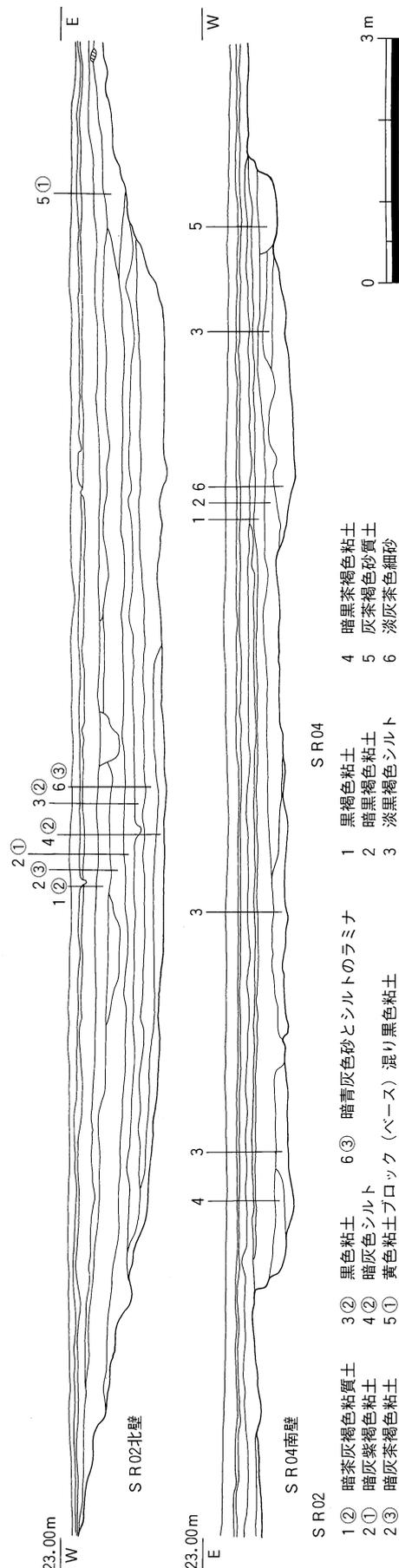
〈SR02下層遺構群〉

SR01・02の合流部の6層上面及びSR02の北肩部より二つの堰状遺構(SX01・02)及び堰状遺構に伴う水溜状遺構(SX03)、溝状遺構(SD14・15)等を検出した。これらの遺構群は弥生時代後期中葉以降に当たるものと考えられる。また、その配置及びSD14・15の切り合いより、2群に分けられる。1群はSX01・SX03・SD14、2群はSX02・SX03・SD15である。1群は2群に対して先行する。

SX01・02は板材・丸太材・枝打ちした自然木・木杭等よりなり、小規模な堰状遺構の基礎部分に当たるものと考えられる。なお、SX02周辺には拳大の自然石が同一面で多量に検出されていて、SX02同様堰状遺構の基礎を構成する部材の可能性もある。配置状での特徴はSX01はSR01からの流れを堰き止めるように東西方向に、SX02はSR02からの流れを堰き止めるように南北方向に配している。SX01の検出長は約10.0m、SX02の検出長は約5.0mを測る。

SX01・02でダムアップされた水を導くのがSD14・15である。位置関係よりSX01に伴うのがSD14、SX02に伴うのがSD15である。この二つの溝はSR02の北岸に配された水溜状遺構(SX03)を介し微高地上に延び、微高地上ではSD15がSD14を切り込んでいる。SD14は検出長約13.0m、幅約1.0～2.0m、深さ約0.3m、SD15は検出長約7.0m、幅約1.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は両者共に暗灰色系のシルトである。

SD14・15で導いた水を一時的に集水した遺構が、水溜状遺構(SX03)である。平面形は東西に長い長円形、断面形は鈍い播り鉢状を呈し、北・南辺には時期を違えてSD14・15が取り付く。長径2.0m、短径1.3m、深さ0.4mを測る。



第22図 SR02・04土層断面図

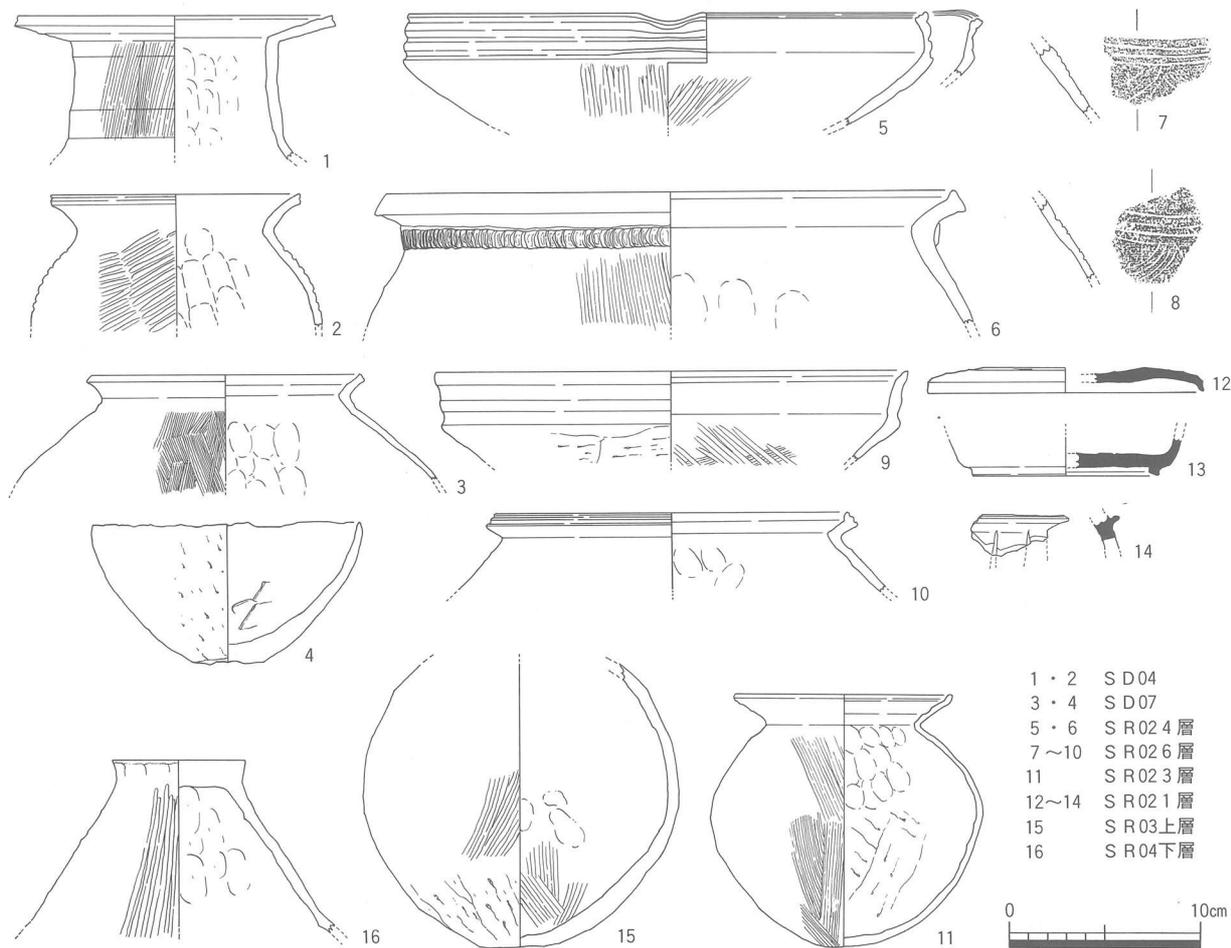


写真15 SD14・15, SX02・03全景 (南より)



写真16 SX03全景 (東より)

内部の構造物としては、SD15に伴う木杭等からなる護岸施設を検出した。護岸施設はSD14・SX03等の1群の堰状遺構の機能が失われた後、新たに2群の堰状遺構を配する際に構築された遺構と考えられ、2群のSD15の線上に当たるSX03の東半部を再掘削し、SD15の西岸の延長上に斜材(木杭)と横材からなる、検出長1.4mの護岸施設を構築したものである。構造的には裏込石等でSX03の西半部を整形した後横材を配し、その上から13本の斜材(木杭)を配した簡単な構造である。



第23図 出土土器実測図(1)

S R03・04 IV区で検出した南北方向に延びる二条の自然河川である。S R03はIV区西部より直線状に北に延びる。S R04はIV区南東部より北西方向へ延び、両者はIV区北半部で合流し一条の自然河川となる。S R03は検出長23.0m、幅7.0m、深さ0.6m、S R04は検出長30.0m、幅8.0～17.0m、深さ0.5m、合流部の河幅は17.0mを測る。両者ともに断面は浅い皿状を呈し、埋土も類似している。埋土を上・下層に大別すれば上層は黒色系の粘土、下層は灰色系の砂である。上層の層厚は約0.4m下層の層厚は約0.2mを測る。出土遺物としては上層より弥生時代中期後半～後期末迄の遺物、下層より少量弥生時代前期・後期の遺物が少量出土している。第23図16はS R04下層（6層）より出土した弥生時代前期の甕の蓋である。

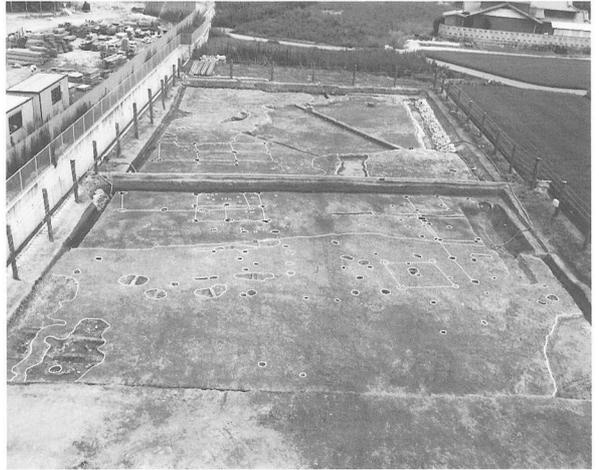


写真17 S R03・04及び上層遺構群全景（西より）

## (2) 古墳時代後期

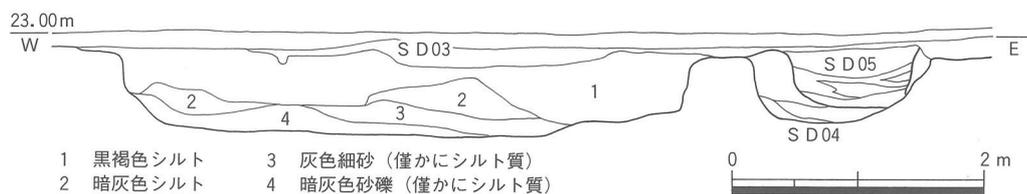
当該期の遺構はI区のS D03・05のみであるが、II区のS R02上層中より同時期の遺物が比較的多量に出土しているため、対象区外のI・II区周辺域に同時期の集落が展開している可能性が高い。なお、S D03は比較的規模も大きく、性格的には大型の灌漑水路と考えられる。

S D03 I区西部でS D04・05に隣接し南端部でS D05に切られる形で検出した、南北方向に延びる大溝である。南西部は不整形に広がっている。検出長26.0m、幅4.2m、深さ0.7mを測る。主軸方位はN 24° Eを測る。断面皿状を呈し、埋土は約8層に細分できる。なお、溝の上面には7世紀前半のピットが少数展開する。出土遺物は多く、傾向として弥生時代後期末～古墳時代前期の資料が主体を占めるが、少量弥生時代中期後半、古墳時代後期～末の資料が出土している。主要な遺物としては弥生土器壺・甕・鉢、土師器壺・甕・高杯、須恵器杯、石器類等が挙げられる。時期的な点では6世紀後半～末頃、性格的には灌漑水路の可能性が高い。



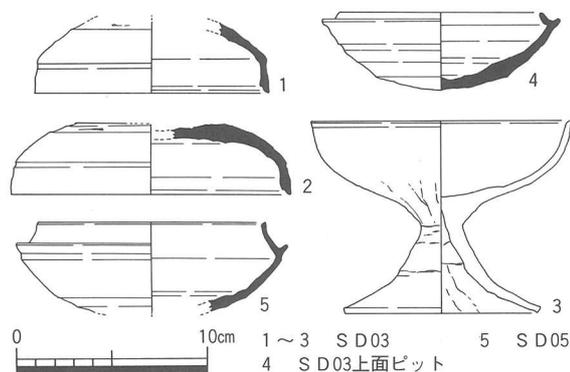
写真18 S D03・05全景（北より）

S D05 I区S D03に隣接しS D03・04を切り込む形で検出した、南北方向に延びる溝である。検出長27.0m、幅1.5m、深さ0.7mを測る。主軸方位はN



第24図 S D03断面図

31° Eを測る。断面U字状を呈し、埋土は約7層に細分できるが大別すれば上・下2層に区分できる。なお、上層段階での溝の方向は、北端部分で二股に別れ西の流路はSD04を切り込む。出土遺物は弥生時代後期末の資料が主体を占めるが、少量古墳時代後期頃の資料を含む。主要な遺物としては弥生土器壺・甕・鉢、須恵器片等がある。時期的な点では6世紀末頃、性格的には灌漑水路の可能性が高い。



第25図 出土土器実測図(2)

### (3) 平安時代後半～鎌倉時代

当該期の遺構は、IV区のSB01～07の建物群、II・III区SR02上面に展開する少量のピット群及び小溝群等である。主要な遺構を挙げれば、SB01～07、SA03、SD16・19等である。これらの遺構の中でII区のSR02上面で検出したSD16は、周辺域の条里型地割の坪界線の延長線上に位置し、条里型の溝と考えられる。SR03・04の上面で検出したSB02～07、SA03等の建物群は主軸方位及び切り合いより2群に分けられる。SB03・04、SA03の南北棟の1群と、SB05～07の東西棟の2群である。切り合いより1群の方が2群に対して先行する。時期的には平安時代後半頃の建物群である。これらの建物群は当該地の集落構成を検討する上で良資料といえる。

SB03 IV区SR03・04合流部の上面で検出した、南北棟の掘立柱建物である。SB03はSB06と切り合いSB04の西に位置する。東半部を溝により切られているため不明瞭な点がある。梁間2間(6.6m)×桁行3間(4.8m)面積31.7㎡を測り、主軸方位はN0°Wを向く。柱穴掘形平面は円形、断面U字状を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.5mを測る。埋土は乳灰色系の砂質土で、4支柱穴で柱痕を、1支柱穴で柱材を検出した。出土遺物としては、土師質羽釜・竈、須恵器、黒色土器碗等が出土している。

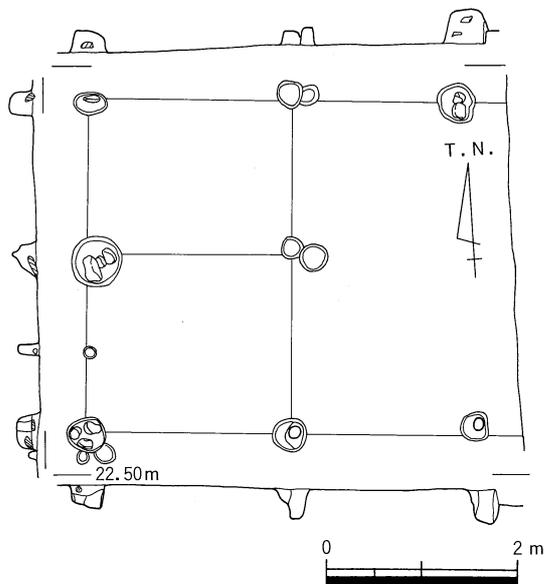
SB06 IV区SR03の上面で検出した、東西棟の掘立柱建物である。SB06はSB03と切り合う。東半部を溝により切られているため規模等で不明瞭な点がある。梁間2間(3.5m)×桁行2間以上(4.2m以上)面積14.7㎡以上を測り、東柱を伴う。主軸方位はN86.5°Wを向く。柱穴掘形平面は円形、断



写真19 SR03・04上層掘立柱建物群全景(西より)

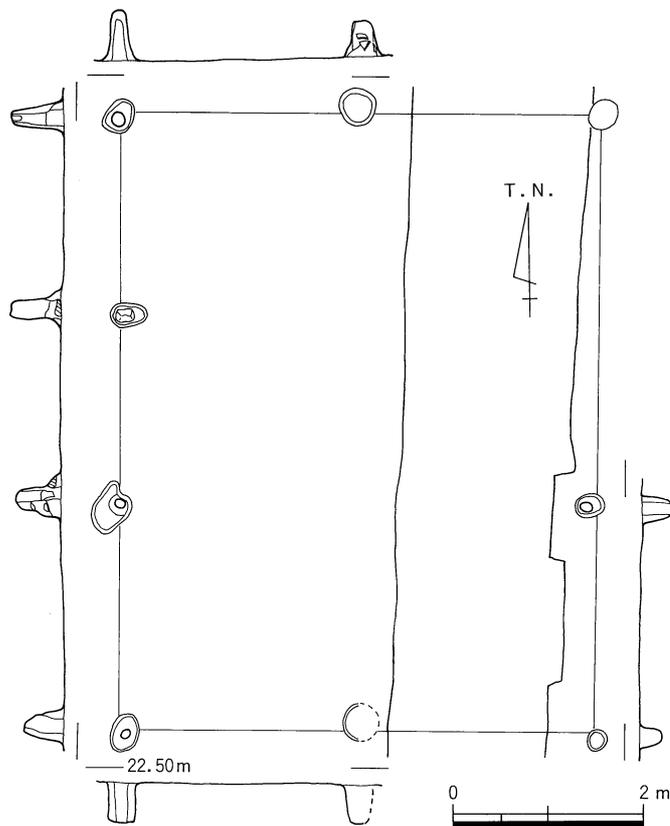


写真20 SD16全景(北より)



第26図 S B 06平・断面図

面U字状を呈し、径0.3~0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は乳灰色系の砂質土で、4支柱穴で柱痕を検出した。出土遺物としては黒色土器椀、土師器羽釜・土鍋、須恵器片等が出土している。



第27図 S B 03平・断面図

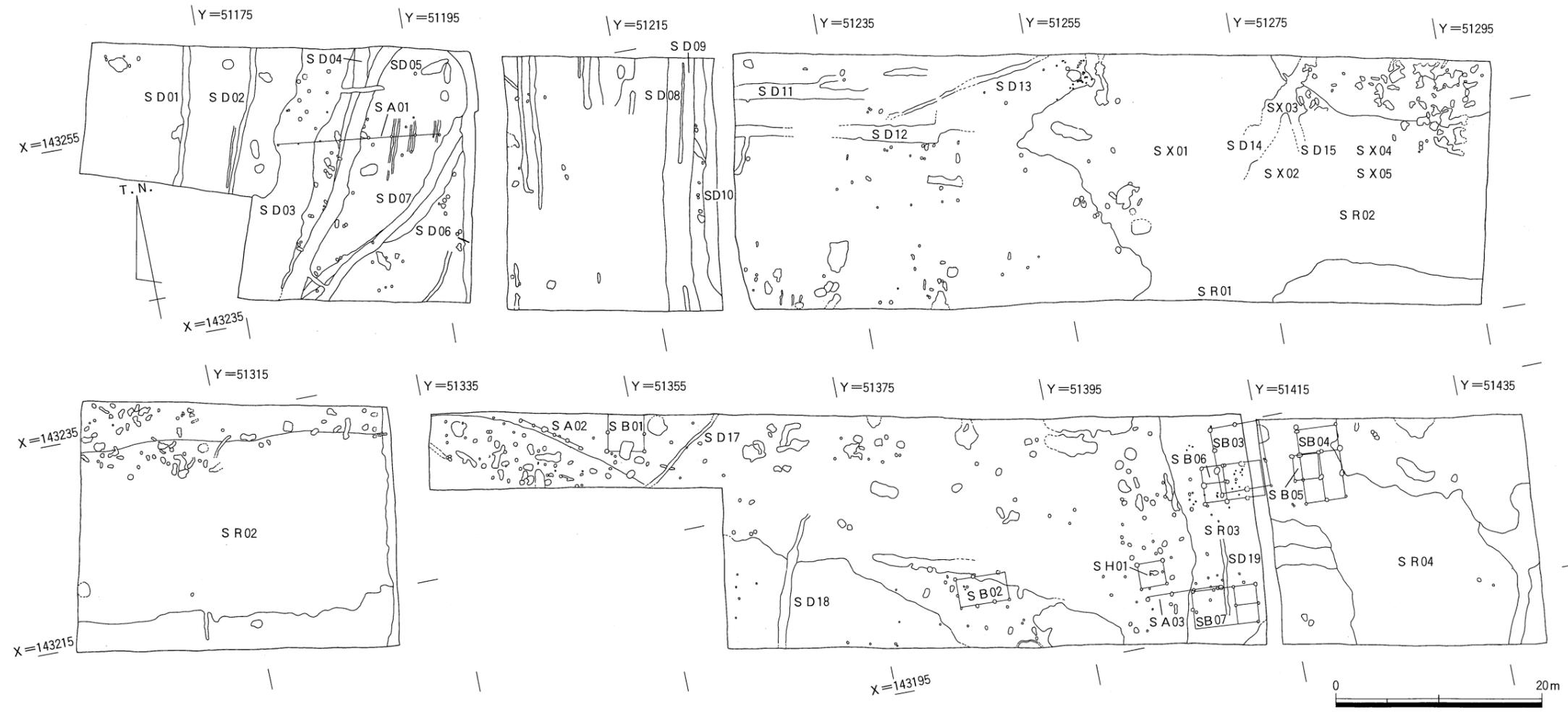
S D 16 II区 S R 02の上面で検出した、南北方向の条里型の溝である。現有道路の問題で西半分のみ検出した。検出長24.0m、幅1.3m以上、深さ0.3mを測る。主軸方位はN 7° Eを測る。断面浅い皿状を呈し、埋土は乳灰色系の砂質土である。出土遺物としては少量弥生土器片、土師器片、須恵器杯片等が

出土している。そのため詳細な時期については問題を残すが、先の建物群とほぼ同時期の可能性が高い。

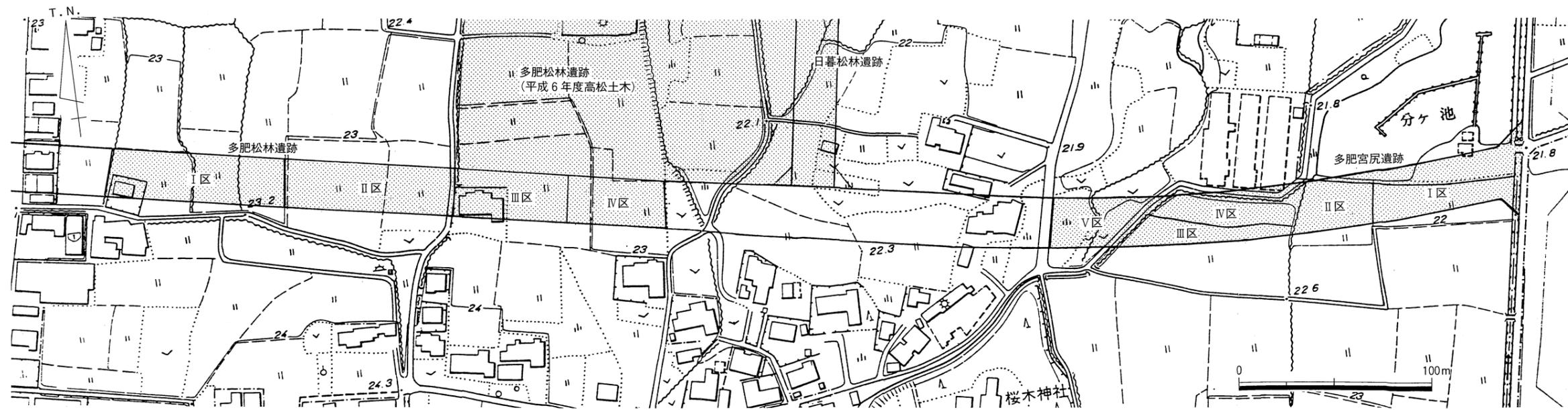
S D 19 IV区 S R 03の上面で検出した、南北方向の小溝である。検出長8.0m、幅0.4m以上、深さ0.05mを測る。主軸方位はN 6° Eを測る。断面浅い皿状を呈し、埋土は乳灰色系の砂質土である。出土遺物としては、土師器片、須恵器片、瓦器椀等が出土している。時期的には13世紀後半頃が考えられる。

遺構名	規模・構造 桁行×梁間(m)	面積(m <sup>2</sup> )	主軸方向
S B 01	1間(1.7)以上×1間(3.6)	6.1以上	N10.5° E
S B 02	3間(4.9)×2間(2.9)	14.2	N91.5° W
S B 03	3間(6.6)×2間(4.8)	31.7	N 0 ° W
S B 04	3間(7.3)×2間(4.0)	29.2	N 1.5° E
S B 05	1間(2.6)×1間(2.2)	5.7	N89.5° W
S B 06	2間(4.2)以上×2間(3.5)	14.7以上	N86.5° W
S B 07	3間(6.4)×2間(3.7)	23.7	N86.5° W

表1 多肥松林遺跡掘立柱建物一覧表



第28図 多肥松林遺跡遺構配置図



第29図 多肥松林遺跡調査区配置図

## V. 多肥宮尻遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

多肥宮尻遺跡は、高松平野の南部に所在する。本調査区周辺には、南から北へ緩やかに傾斜する扇状地が形成されている。調査区の北西部は、周辺地割の乱れ等から香東川の旧河道であることが確認されており、当該低地には、その水源を利用した分ヶ池や下池・長池等が点在している。I・II区北方に隣接する分ヶ池は、かつての池台池の一部に相当し、旧池敷は東方に広く及んでいる。

なお、付近一帯は、空港造成の改変を受けていないため、方格子地割が遺存しており、調査区東端の水路は、山田・香川郡境に一致すると考えられている。

### 2. 調査成果の概要

調査対象地は空港跡地北辺道路の延長線上にあり、東西延長約235m、調査面積約4,000m<sup>2</sup>を測る。調査区の設定は東よりI～V区に5区分し、進入路・作業ヤードの関係から各調査区を小分けしている。なお、今年度はIV区を除く調査を実施した。

地形的には南から北に緩やかに傾斜する沖積平野に位置するが、I・II区の遺構面に限っては調査区北方に隣接する分ヶ池に向かって、周辺コンターより強い傾斜をとり、約0.5mの比高差を計る。V区部分は中央付近を最深部として顕著な窪みがみられ、南西から北東への旧河道の存在が調査前から想定できた。

基本層序はI・II区南側及びIII区では耕作土直下で明黄褐色粘質土・灰色砂礫層の地山が認められるが、I・II区北側では耕作土下に中世前半以降の連続した水田層が堆積し、褐灰色粘質土を経て、遺構検出面である灰色砂礫層ないし明黄褐色粘質土にいたる。なお、出土遺物から中世に堆積した褐灰色粘質土は水田層の可能性があり、平・断面で畦畔等の検出に努めたが確認できなかった。V区では0.5m以上の造成土下に近代水田層がみられ、遺構検出面で、旧河道埋土（無遺物）である灰色砂礫層となる。

今回の調査では縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代後期～奈良時代、鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。このうち縄文時代晩期は自然河川の最深部から少量の遺物が出土したにすぎず、周辺に当該期の遺跡が展開する可能性を指摘するにとどまる。



写真21 I区全景（西より）



写真22 III区全景（東より）

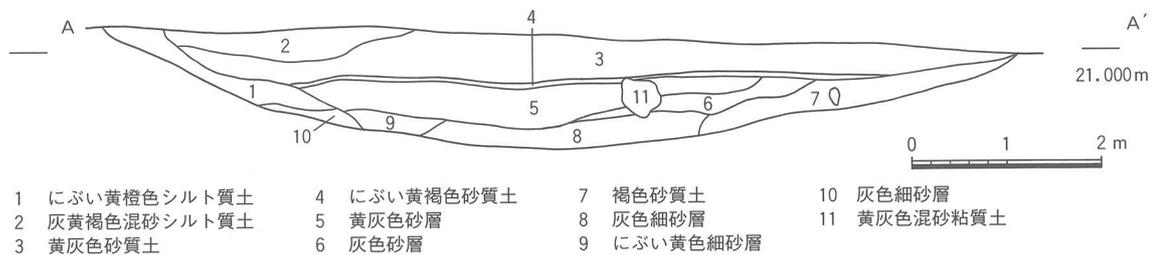
(2) 縄文時代晩期

当該期の遺構はI区において自然河川（SR02）を1条検出したのみで、居住遺構は一切検出できなかった。居住域の中心は調査区南方の微高地上に展開すると考えられる。

SR02 I区東端付近で検出した自然河川である。検出長約11.0m、幅約9.5m、深さ1.25mを測る。おおむね南東から北西方向に検出したが、北西側はSR01との前後関係により失われている。埋土は粘質土が中心埋土のSR01やSR03と異なり、砂質土の相互層からなる。下層に非常にきめ細かい灰色細砂層、中層に黄灰色砂層、上層にやや粗い砂粒による黄灰色砂質土層がそれぞれ堆積している。おおむね三層に大別できるが、上層と中層間には鉄分の沈着層が介在している。出土遺物から縄文時代晩期末の埋没が想定できる。



写真23 I区SR02全景（南東より）

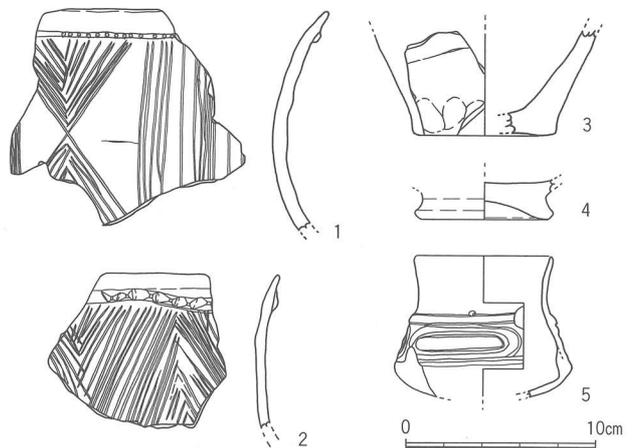


第30図 I区SR02土層図

第31図はSR02下層の灰色細砂層から出土したものの一部である。上層の黄灰色砂質土からも遺物が出土しているが、いずれも細片のみで器種・時期等を断定する事は不可能である。

1・2は深鉢の口縁部から頸部にかけてである。いずれも口縁部からやや下がった位置に刻目突帯をめぐらし、頸部には多様なヘラ描き沈線文様が施されている。1と同一個体である頸部から胴部にかけての破片には、境に突帯はなく、1条突帯の深鉢である。3は深鉢の底部である。底部側面がゆるやかに張出し、立ち上がりはやや急である。底面はごく浅い上げ底を呈する。4は深鉢?の底部である。底部側面が外方に強く張出し、下膨れの曲線を描いて立ち上がる。底面は顕著な上げ底を呈する。5は黒色磨研の小型壺形土器である。胴部外面には三叉文等が丁寧な磨き調整によって施され、頸部には孔がみられる。内面にも磨きが施されている。

1～5はおおむね晩期末と考えられる。

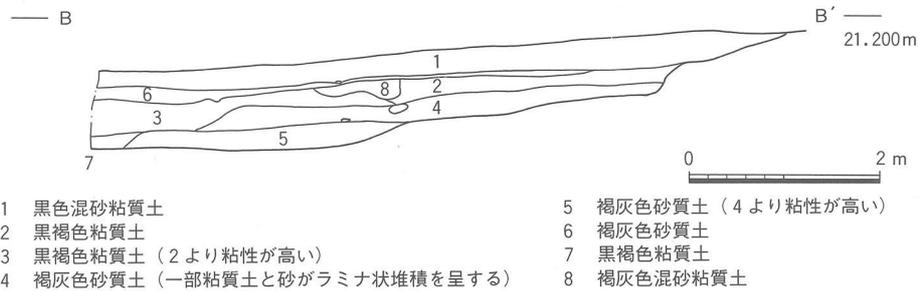


第31図 SR02出土遺物実測図

(2) 弥生時代

当該期の遺構はⅠ・Ⅱ区で2条の自然河川跡を検出している。S R01は埋土内に多量の遺物を包含しており、鋏等の木製品・未成品も出土している。他にも当該期の可能性のある遺構を検出しているが、遺物の出土が稀薄なため断定し難く、結果遺構数とS R01の遺物出土量が相反する事になった。この要因としてⅠ区において顕著であるが、南方に隣接する水田との0.6m程の比高差等から、後世の削平により深度の深い自然河川のみが遺存したと考えられる。現地形から顕著な削平を受けていないと思われる調査区南方を中心に当該期の遺跡が展開する可能性を指摘できる。

S R01 Ⅰ区～Ⅱ区にかけて検出した自然河川である。検出長は約95.0mを測り、調査区北方に所在する分ヶ池を取り巻くように検出している。南側の岸は検出できたが、北側は調査区外へ延びるため川幅は不明である。検出最大幅約9.5m、最深部約1.1mを測る。埋土は下層に自然河川として機能していたであろう褐灰色砂質土が、中層に埋没が開始したと考えられる黒褐色粘質土層、上層に黒色混砂粘質土層がそれぞれ堆積している。なお、埋土はおおむね三層としているが一様ではない。



第32図 Ⅰ区S R01土層図

S R01の出土遺物の大半は上層・中層から出土している。土器では壺・甕・鉢・高杯・紡錘車等が、石製品では鋏・打製、磨製石包丁・太刃蛤形石斧等が、木製品では『木器集成図録・近畿原始篇』の分類による広鋏Ⅰ式2点・曲柄平鋏CⅢ式1点・曲柄平鋏DⅢ式1点・狭鋏未成品1点・鋏未成品1点・用途不明数点が出土している。木製品を除くとコンテナに67箱分出土している。上層・中層から弥生時代前期後半～後期後半、下層から弥生時代前期中葉～後半の土器が出土している。出土遺物・土層堆積状況から、S R01は弥生時代前期中葉段階に自然河川として機能しており、その後前期後半～後期後半にかけて漸次埋没したと想定できる。



写真24 Ⅰ区S R01木製品出土状況

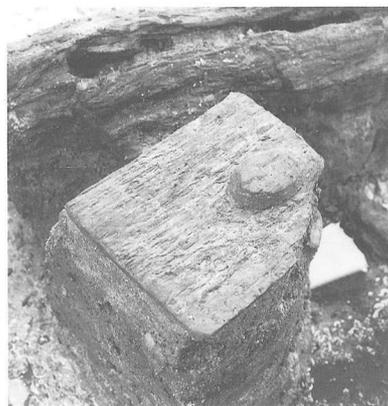
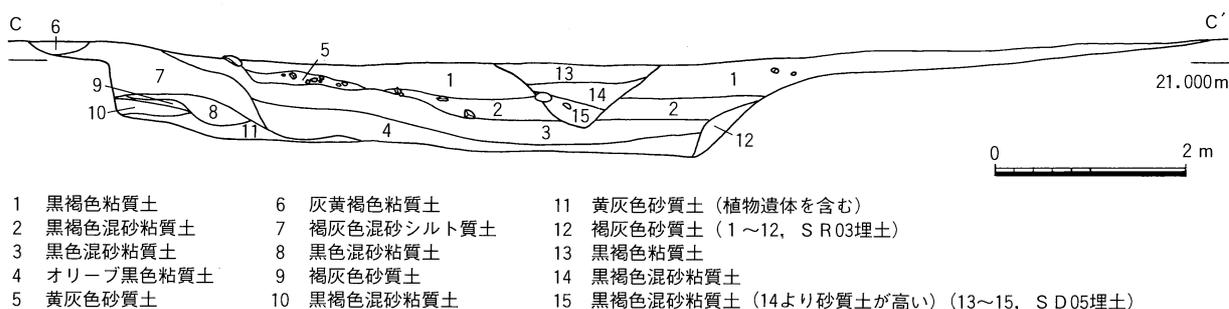


写真25 Ⅰ区S R01木製品出土状況



写真26 Ⅰ区S R01木製品出土状況

S R03 II区中央部に置いて検出した自然河川である。検出長約16.0m、深さ約0.9mを測る。川幅は西側の岸が緩やかに立ち上がり、オーバーフロー気味に埋土が遺構面を覆っているため、不明確であるが、この部分を除くと約8.5mを測る。一方、東側の岸はかなり急に立ち上がっている。方向はおおむね南西から北東方向にかけて検出しており、北東側ではS R01と前後関係をもつ。埋土は断面ポイントによって、差異がみられ一様ではないが、下層にオリーブ黒色粘質土、中層に黒色混砂粘質土、上層に黒褐色粘質土がそれぞれ堆積している。出土遺物は下層のオリーブ黒色粘質土から弥生土器と考えられる細片がごく少量出土している程度である。埋没時期は、S R01との前後関係やS R03埋没後に掘削されたS D05との関係から、弥生時代後期後半以降6世紀初頭以前と考えられる。



第33図 II区S R03・S D05土層図

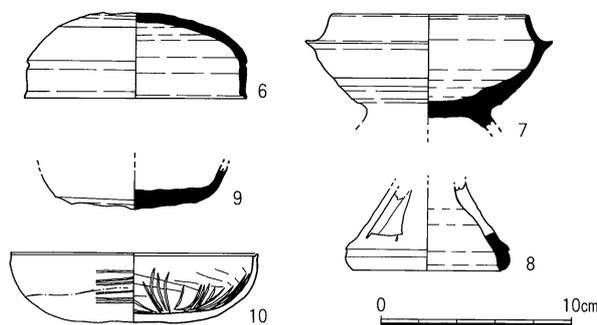
### (3) 古墳時代後期～古代

当該期の遺構はII区のS D05のみ検出している。周辺に当該期の遺跡が展開する可能性を指摘できる。

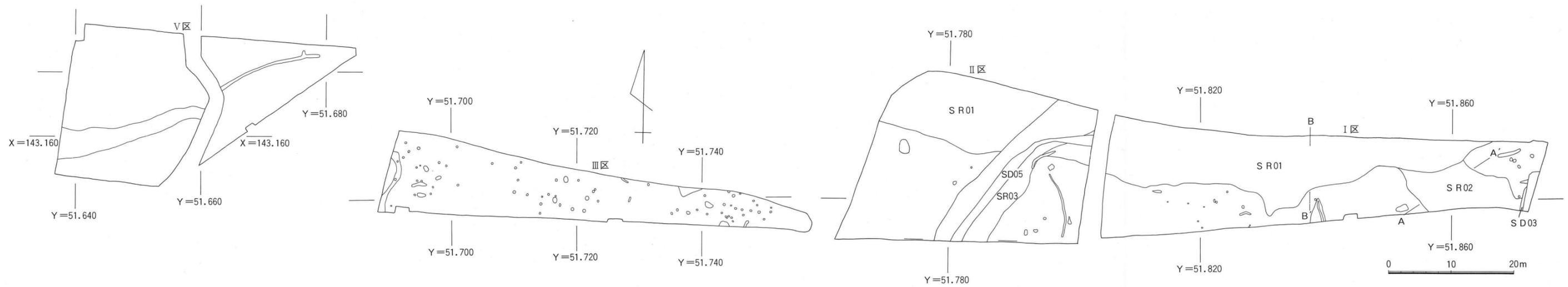
S D05 検出長約28m、幅約1.75m、深さ約0.68mを測る。主軸方位はS R03とほぼ同方向のN36° Eから、埋没後のS R01付近でN75° Eに屈曲する。断面はV字ないしU字状を呈し、埋土はおおむね下層に黒褐色混砂粘質土、上層に黒褐色粘質土が堆積している。S D05は埋没後のS R01・03上面に掘削されており、上面精査を実施したが両者の埋土が酷似していたため検出できず、結果断面を中心に確認した。出土遺物はおおむね6世紀初頭と7世紀前半の2時期が認められ、須恵器では蓋杯・有蓋高杯・甕等、土師器では杯・高杯・甕等が出土している。S R05の性格であるが、埋没後、湿地状を呈していたS R01・03付近の滞水を防ぐための灌漑用の水路と想定できる。

第34図はS D05から出土した遺物の一部である。

6は須恵器杯蓋で、口縁端部は比較的シャープである。7・8は須恵器有蓋高杯である。長脚化以前のもので、方形の三方透かしが施されている。6～8はほぼ同時期と考えられる。9は須恵器杯で、底部に粗い回転ヘラ削りがみられる。10は土師器杯である。内面は板ナデ整形痕がみられ、1段の螺旋状ヘラ磨きが、外面には横方向の粗いヘラ磨きが施されている。9と10はおおむね同時期と考えられる。



第34図 S D05出土遺物実測図



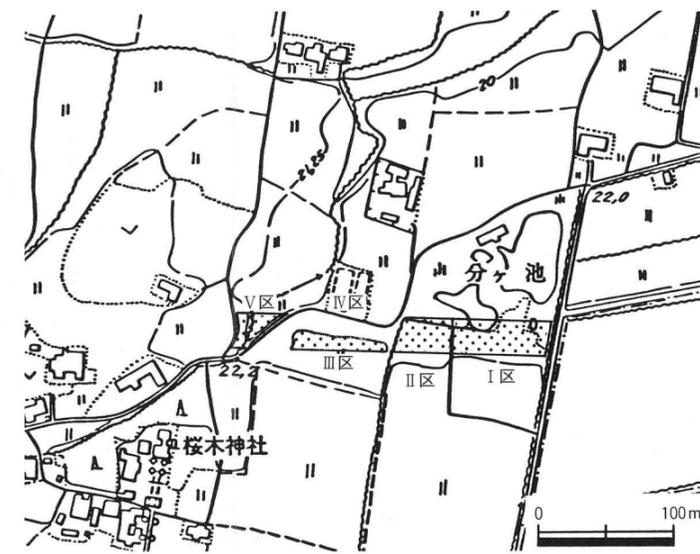
第35図 遺構配置図



写真27 II区SR01・03全景(東より)



写真28 I区SR01遺物出土状況(北より)



第36図 調査区割図

#### (4) 鎌倉時代

当該期の遺構は対象地のほぼ全域より検出している。各時期を通して遺構密度は稀薄であるが、当遺跡においては最も遺構密度の高い時期にあたる。Ⅲ区において比較的多くの遺構を検出しており、ピット・土坑・溝状遺構がみられる。遺構からの遺物の出土は稀薄であるが、おおむね12世紀後半～13世紀を中心とした時期の杯・小皿・椀・土鍋・羽釜（土師器）、土師質竈の一部、須恵器杯・甕、瓦器椀（和泉型）等が出土している。土師器杯・小皿の底部外面の切り離し手法はすべてヘラ切りで、回転糸切りによるものは認められない。ピットは合計99基検出しており、埋土からは灰黄色と黒褐色の2時期が確認できる。なお、対象地が狭いためか、掘立柱建物・柵列等を構成するものはみられない。



写真29 Ⅲ区西端部全景（南より）

### 3. まとめ

今回の多肥宮尻遺跡の調査では、縄文時代晩期～鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出した。前述したように、鎌倉時代のピットを除くと居住遺構の可能性のある遺構は確認できず、SR01を中心とした自然河川からの遺物出土量と対照的な結果となった。当遺跡東側に隣接する空港跡地遺跡Ⅰ-14・15区において、弥生時代終末の竪穴住居、古墳時代中期末葉～後期後半にかけての竪穴住居・土坑・溝状遺構が少数確認されているが、居住域の中心とは考えられず、削平による遺構の消失を含め、当遺跡南方に広がる微高地を中心に各時期の集落が展開する可能性が高い。

また、当遺跡東方は弘福寺領讃岐国山田郡田岡の南地区に比定されており、調査区は香川郡1条13里に相当する。田岡等によるとⅠ区東端付近は8世紀中葉において、津田西口ないし津田となっている。津田とは水の多い湿潤な田を意味する。調査において、遺構面直上の褐灰色粘質土が土壤等から水田層の可能性を考え、平・断面で畦畔等の検出に努めたが、確認できなかった。堆積時期は、13世紀以降の土器が出土しており、田岡とはかなりの時期幅がみられ、津田に相当する遺構（田）が仮に存在したとすれば、この段階の削平により失われていると考えられる。なお、条里地割に合致する溝状遺構はⅠ区東端付近で検出したSD03のみで、坪境等をしめす溝状遺構は確認できない。Ⅱ・Ⅲ区間に所在する現水路が郡境から約110mを測り、当該部分での踏襲、もしくは溝状遺構等の施設による条里区割が施行されていなかったと考えられる。

今後は自然河川から出土した多量の遺物の分析により、層位ごとの詳細な時期決定とそれを踏まえた自然河川の復元及び周辺集落との関係、さらに調査成果と文献の比較等について言及する必要がある。

#### 〈参考文献〉

奈良国立文化財研究所 『木器集成図録 近畿原始篇』 1993

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成4年度 1993

高松市教育委員会 『讃岐国弘福寺領の調査』 1992

## VI. 尾端遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

尾端遺跡は、高松市と三木町の境界より東へ延長300m、町道田中氷上線に隣接した木田郡三木町田中に所在する。地形的には蓮池の西岸を形成する低丘陵の延長部分に位置し、その丘陵の西斜面に遺跡は展開する。遺跡が斜面部に展開する関係上丘陵頂部と裾部との標高の差は著しく、頂部で27.0m～裾部で22.0m前後を測る。

周辺の遺跡では弥生時代～中世までの諸遺跡が存在する。旧石器・縄文期の資料は極めて微量であるが十川東・平田遺跡の有舌尖頭器がある。弥生の遺跡は最近の調査により増加傾向にある。前期の段階では農学部遺跡、福万遺跡、中期では鹿伏・中所遺跡、白山2・3遺跡等の集落がある。なお、白山1遺跡からは扁平鈕式の銅鐸が出土していることは著名である。後期には鹿伏・中所遺跡、西土居遺跡等の拠点集落の調査がある。また、本遺跡の隣接地の十川東・平田遺跡、砂入遺跡等では小規模な集落の調査例がある。古墳時代になると本遺跡の南方の丘陵上には後期古墳が点在するようになる。本遺跡の所在する低丘陵上には雷塚古墳、四十塚古墳等の古墳が所在するが、実態は不明である。集落の調査例は少なく、本遺跡より東へ300m離れた南天枝遺跡及び砂入遺跡、砂古遺跡等の調査例があるのみである。古代の寺院跡では白鳳～奈良時代にかけて相次いで建立されたと考えられる始覚寺、香蓮寺、上高岡廃寺、長楽寺等が知られている。集落の調査例では本遺跡及び西尾遺跡等の調査がある。また、古代の幹線道である南海道は、本遺跡の北約660mの地点で、東西方向に配されているものと推定されている。中世では東讃で勢力を持った十河氏の居城である十河城が南西の丘陵上に築かれる。その関係から、周辺には小規模な中世山城が多数点在する。また、集落では南天枝遺跡、十川東・平田遺跡、福万遺跡等、最近の調査により増加傾向にある。



第37図 遺跡位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)

## 2. 調査成果の概要

本年度調査は昨年度からの継続調査であることから、昨年度までの地区名、グリッドの設定を踏襲して調査を実施した。本年度の調査区は昨年度設定したⅡa～Ⅱd区の内、東端部のⅡa区及び西端部のⅡd区の一部で面積947m<sup>2</sup>を測る。調査地の地目は全て宅地である。

地形的には本遺跡は、低丘陵の斜面地形と低地部よりなる。低地部は、蓮池方向から延びる埋設谷が本遺跡の立地する丘陵裾部を挟み、その上面に遺跡が展開する。調査区を地形で区分すれば、斜面部はⅡa・b区、低地部はⅡc・d区に当たる。昨年度の調査ではⅡa・b区からは古墳時代末～奈良時代、近世後半の集落及び墓群、Ⅱc区ではⅡb区より続く古墳時代末～奈良時代の集落、Ⅱd区西半部では古墳時代末の溝群を検出している。今回の調査ではⅡa区より奈良時代、近世末の遺構・遺物、Ⅱd区東半部より古墳時代末の遺構・遺物を検出した。

### (1) Ⅱa区

対象地東端部、低丘陵の頂部に位置する調査区である。調査面積は282m<sup>2</sup>を測る。Ⅱa区からは奈良時代、近世末の遺構・遺物を検出した。奈良時代の主要な遺構を挙げればSB12・13、SD03・33、近世末の主要な遺構を挙げればSK05、SE04～06、SD27等の遺構が挙げられる。

SB13 Ⅱa区南西部の斜道部分より検出した東西棟の掘立柱建物である。調査区の幅が狭いので建物の一部を捉えただけである。梁間2間(4.0m)×桁行1間以上(1.6m)面積6.4m<sup>2</sup>以上を測り、主軸方位はN3°Eを測る。柱穴掘形平面は不整形円ないし不整形方形を呈し、断面は不整形U字状を呈し、径0.5m～0.8m、深さ0.3～0.6mを測る。埋土は淡灰褐色系の砂質土である。出土遺物は須恵器と土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残すが、周辺の建物群との関係で8世紀頃の可能性が高い。

SD03 昨年度調査区のⅡb区より続き、東西方向に延びる8世紀前半の条里型の溝である。かなり削平を受けていて残りが悪い。検出長55.0m、幅1.0～4.2m、深さ0.1～1.2mを測り、主軸方位はN83.5°Wを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は淡灰黄褐色粘質土を呈する。遺物としては須恵器と土師器の細片が少量出土した。

### (2) Ⅱd区

対象地西端部、低丘陵の裾部より低地部に位置する調査区である。調査面積は665m<sup>2</sup>を測る。Ⅱd区は、蓮池方向から延びる埋設谷の堆積層が遺跡のベース面になる。そのベース面上には、①7世紀前葉、②7～8世紀後半の2時期の遺物包含層を検出した。遺構面はこれらの包含層間で上・下2面確認した。下層遺構面は①包含層を除去した下面で(7世紀前葉以前)、上層遺構面は①②包含層間で(7世紀中葉～8世紀前半)検出した。なお、①包含層は出土遺物が少量で時期的な点で再考を要する。本年度調査区では下層遺構面上の遺構は微量で、大多数の遺構は上層遺構面上から、古墳時代末の遺構・遺物を検出した。主要な遺構を挙げればSB14～17、SD10～12、20～26等が挙げられる。

掘立柱建物群は、①SB14・16 ②SB15・17の2時期2群に分けられる。切り合いより①が先行する。時期的な点では7世紀前半頃の建物群である。昨年度調査区を含めⅡd区上層遺構面上からは、東

西方向及び南北方向の小規模な溝が多数検出している。これらの小溝群は幅が約0.3m程で主軸方向も酷似し、配置上でも企画性が見られる点より、ほぼ同時期の地割溝群と考えられる。時期的な点では7世紀中葉頃と考えられる。また、Ⅱd区ではこれらの地割溝群に切られるSD12・15・26等の溝群を検出している。これらの溝群は、先の地割溝群の前身の7世紀前葉頃の溝状遺構と考えられる。

SB14 Ⅱd区北東部でSB15・SD10に切られる形で検出した、東西棟の総柱の掘立柱建物である。梁間2間(3.8m)×桁行3間(5.8m)面積22.0m<sup>2</sup>を測り、主軸方位はN84.5°Eを測る。柱穴掘形平面は不整形を呈し、断面は不整U字状を呈し、径0.5~0.8m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む黒色系の粘質土よりなる。遺物としては須恵器杯、土師器片等が出土し、時期的には7世紀前葉以降と考えられる。



写真30 SB14・15全景(南より)

SB15 Ⅱd区北東部でSB14・SD10を切り込む形で検出した、東西棟の総柱の掘立柱建物である。梁間2間(3.4m)×桁行3間(5.2m)面積17.7m<sup>2</sup>を測り、主軸方位はN88.5°Wを測る。柱穴掘形平面は不整円形を呈し、断面は不整U字状を呈し、径0.3~0.6m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は黄灰色の粘土ブロックを含む淡黒色系の粘質土よりなる。遺物としては須恵器杯、土師器片、土製管玉等が出土し、時期的には7世紀後葉以降と考えられる。



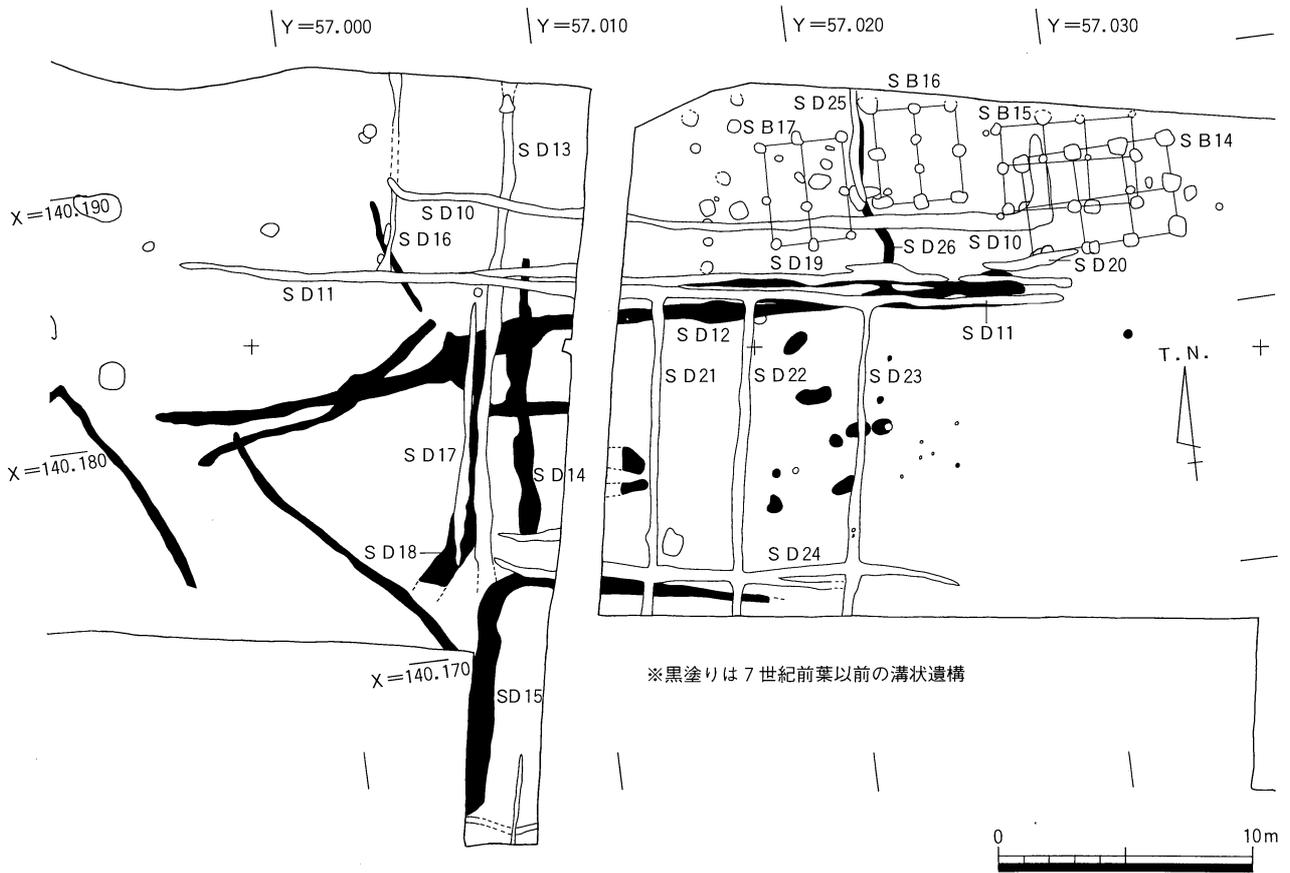
写真31 SB16・17全景(南より)

SB16 Ⅱd区中央北で、SB17の東側で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁間2間(3.2m)×桁行2間(3.7m)面積11.8m<sup>2</sup>を測り、主軸方位はN2.5°Eを測る。なお、この掘立柱建物は棟方向に2柱穴の東柱を配している。柱穴掘形平面は不整円形を呈し、断面は不整U字状を呈し、径0.4~0.8m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む淡黒色系の粘質土よりなる。遺物としては須恵器と土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残すが、配置よりSB14と同時期の可能性が高い。

SB17 Ⅱd区中央北で、SB16の西側で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁間2間(3.1m)×桁行2間(4.0m)面積12.4m<sup>2</sup>を測り、主軸方位は

遺構名	規模・構造 桁行×梁間(m)	面積(m <sup>2</sup> )	主軸方向
SB12	2間(3.3)×?	?	N 4° E
SB13	2間(4.0)×1間(1.6)以上	6.4以上	N 3° W
SB14	2間(3.8)×3間(5.8)	22.0	N84.5° W
SB15	2間(3.4)×3間(5.2)	17.7	N88.5° E
SB16	2間(3.2)×2間(3.7)	11.8	N 2.5° W
SB17	2間(3.1)×2間(4.0)	12.4	N 1.5° W

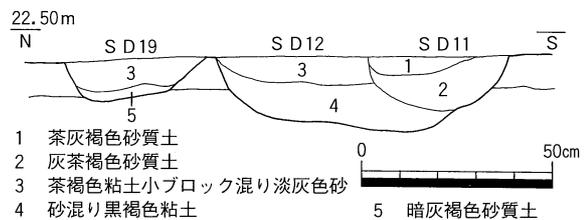
表2 尾端遺跡掘立柱建物一覧表



第38図 II d区遺構配置図

N1.5° Wを測る。なお、この掘立柱建物は棟方向に2柱穴の東柱を配している。柱穴掘形平面は不整円形を呈し、断面は不整U字状を呈し、径0.4~0.8m、深さ0.2~0.5mを測る。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む黒色系のシルトよりなる。遺物としては須恵器と土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残すが、配置よりS B 15と同時期の可能性が高い。

地割溝群 昨年度調査区を含めII d区上層遺構面上より検出した地割溝群は、幅0.3~0.6m、深さ約0.2mを測り、主軸方向もかなり類似する。断面は浅いU字状を呈し、埋土は淡灰色系の砂質土を呈する。これらの溝群を配置上で分ければ、東西溝でA~C群、南北溝でC~E群に分けられる。A群-最も北に位置する



第39図 S D11・12・19土層断面図

SD10が当たる。主軸方位はN81° Wを測り、検出長27.0mを測る。なお、SD10は東端部で短く北に屈曲する。B群-A群より南に約3.0m離れ、平行に延びるSD11・19・20等が当たる。主軸方位はN81° Wを測り、検出長35.0mを測る。なお、B群周辺は短期間で、同規模で同方向の溝が複雑に切り合っている。C群-最も南のSD24が当たる。主軸方位はN79.5° Wを測り、検出長19.0mを測る。なお、C群には、南北溝のD群が直交している。D群-SD11より南に分岐しC群に直交するSD21~23等が当たる。主軸方位はN10° Eを測り、検出長11.0mを測る。E群-東西溝のA・B群に切られるSD13・16・17等である。主軸方位はN10.5° Eを測り、検出長20.0mを測る。遺物としてはSD10・19



写真32 地割溝群全景（西より）

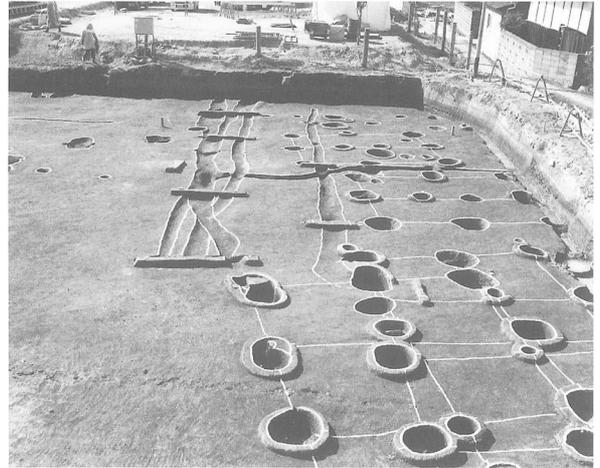
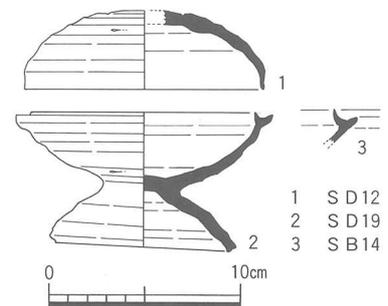


写真33 SD12全景（東より）

・20等より須恵器杯・有蓋高杯・高杯，土師器片等が少量出土している。地割溝群の時期としては，遺構面を被覆する8世紀後半の包含層と，遺構面が展開する下層の包含層の時期より7世紀中葉～8世紀前半までの時期幅が考えられるが，出土遺物より7世紀中葉頃の可能性が高い。

SD12 昨年度調査区より連続して検出した不整形な東西溝である。溝東部では南北溝SD26が取り付く。検出面は上層遺構面上であり，上面を地割溝B群が切り込んでいる。なお，昨年度調査区では溝中より小規模な木樋（SX02）を検出している。検出長35.0m，幅0.5～1.3m，深さ0.2m，主軸方位はN83.5°Wを測る。断面は浅いU字状ないし浅い皿状を呈し，埋土は黒色系の粘土よりなる。遺物としては須恵器杯，土師器片等を少量出土した。時期的には出土遺物より7世紀前葉の可能性が高い。

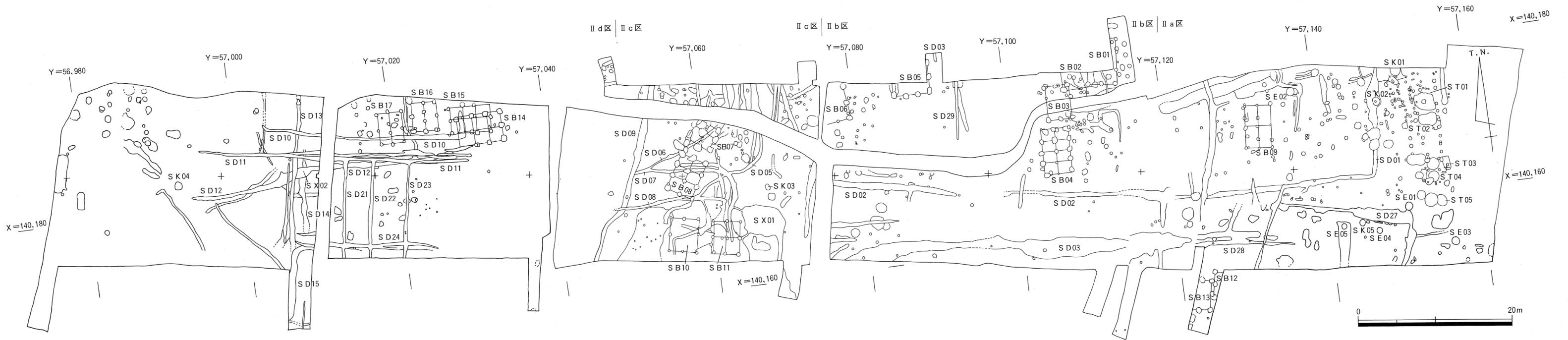


第40図 出土土器実測図

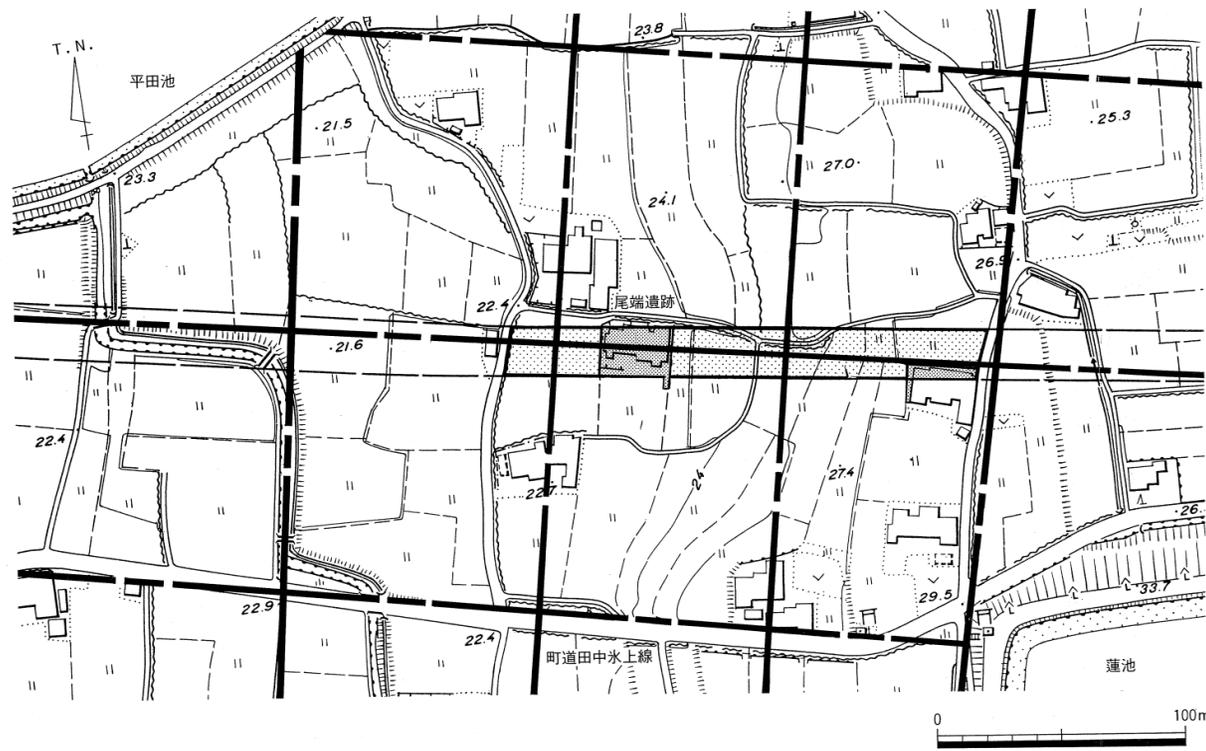
### 3. まとめ

尾端遺跡周辺域の条里型地割の状況について触れる。対象地の北方654mの地点には推定南海道が延びる。また，西方220mには旧山田郡と三木郡の郡界線が南北に延びる。その南海道及び郡界線を基に，北方の南海道周辺は企画的に条里型の地割が配されているが，尾端遺跡周辺は蓮池の西岸から平田池方向に延びる埋設谷，蓮池より吉田川方向に延びる埋設谷及び本遺跡の立地する南北方向の低丘陵が地形を乱し，現在の地形より条里型の地割を復元するには比較的困難な地域になっている。しかし，周辺に残る地割線を延長することにより本遺跡周辺及び対象地内を通る坪界線を復元すれば，南海道より6町目（里界）に当たる東西の坪界線（坪界線A，N10°E）及び二条の南北の坪界線（坪界線B・C）が復元できる。南北の坪界線の内，坪界線Cは先に触れた地形の制約によるものと考えられ，南西方向に歪み，1町（109m）四方の方格地割にはなりえていない。これらの推定坪界線を基に，全体図の中で坪界線を投影したのが第43図である。その中より坪界線に合致する遺構，及びそのラインに規制を受けたと考えられる遺構を抽出すれば，①地割溝群 ②SD29・30 ③SD03等の溝状遺構が挙げられる。なお，図中の坪界線Aに合致するSD01・02は近世の溝状遺構である。

坪界線Aが合致するのは地割溝B群である。B群の周辺は同規模で同方向の溝が錯綜していて，短期

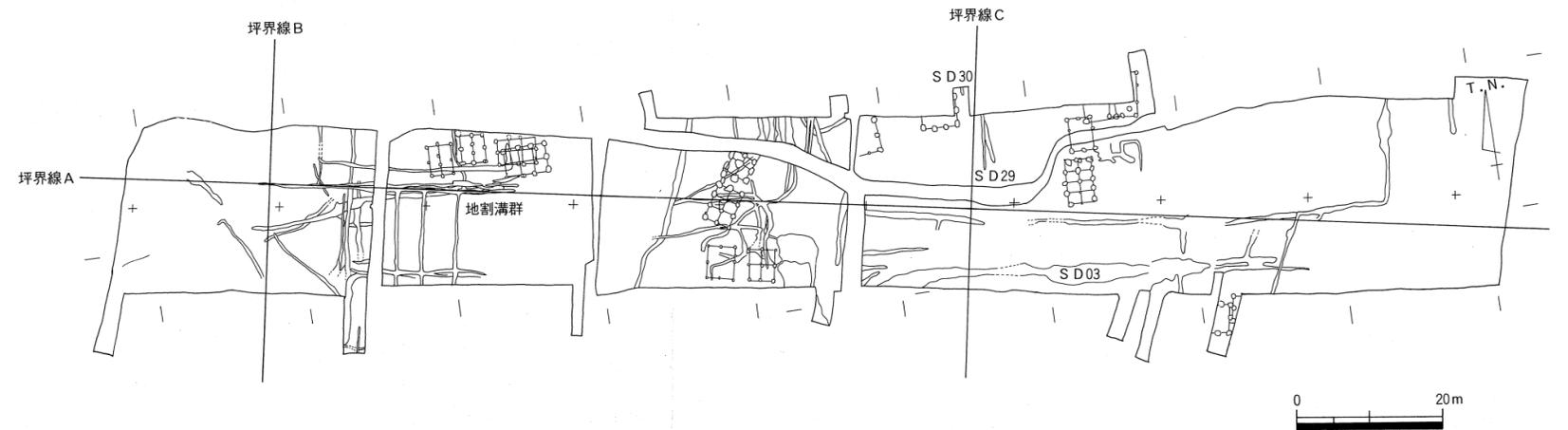


第41図 尾端遺跡遺構配置図



第42図 尾端遺跡周辺条里型地割詳細図

- 平成8年度調査
- 平成9年度調査



第43図 尾端遺跡内条里型地割推定図

期間に同規模の溝の付け替えが頻繁に行われたことが推測される。なお、この地割溝群は1/10町(10.9 m)方格を基準に配されたものと考えられ、B～E群の配置はかなり企画的である。また、A・B群は南北3.0m隔てて平行に延びる、この空間には同時期の遺構はなく、一つの見方として「道状遺構」の可能性はある。なお、四辺をB～D群に囲まれた長地型の区域は、面積35～40m<sup>2</sup>を測る平坦な空間である。この空間は道状遺構に取り付く「畠状遺構」の可能性はある。坪界線Cがほぼ合致するのはSD29・30である。SD29・30は出土遺物が少なく詳細な時期は不明だが、検出状況より7～8世紀頃の可能性が高い。SD03は、厳密には坪界線に合致する遺構ではないが、配置より坪界線に規制を受けた8世紀前半の溝状遺構と考えられる。最後に集落との関係でこの地割企画を見れば、II a・b区では、坪界線AとSD03の間には7～8世紀頃の掘立柱建物は皆無で、その東西に細長い幅7～8mの空間を外した状態で南北に集落が分かれて展開している。坪界線Aを基にした企画的な配置と考えられ、集落配置のうえでもこの地割企画に規制を受けたものと理解できる。なお、これらの溝状遺構は7世紀中葉～8世紀前半頃の時期に当たり、県下の条里型地割の資料中でも最古の部類に属する。

〈参考文献〉

- 金田章裕 1988「第六章 条里と村落生活」『香川県史 第1巻』四国新聞社  
 広瀬和雄 1989「畿内の条里地割」『考古学ジャーナル 310』ニュー・サイエンス社



第44図 尾端遺跡周辺条里型地割 (1/7,000)

## Ⅶ. 住屋遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

住屋遺跡は、大川郡大内町三本松の国道11号線から南に入る標高6m前後の平坦地に所在する。遺跡の西側約100mを改修された古川が、南東方向には標高97.1mを最高点とする丘陵が、約1.5km北には瀬戸内海が広がる。

周辺の遺跡として、まず、当遺跡の南南東方向に大日山古墳がある。独立丘陵から派生する尾根筋に立地した古墳時代前期の前方後円墳である。また、南側の山隴から派生する尾根筋には古墳時代後期の原間1号墳がある。これは南東方向に開口する片袖式の横穴式石室を有する円墳である。谷筋を挟んだ東側の尾根筋には原間2号墳があり、この2本の尾根筋に挟まれた緩傾斜地で、四国横断自動車道工事に伴う調査により弥生時代から中世にかけての複合遺跡である原間遺跡が確認されている。また、南西方向には正一位の格式をもつ水主神社があり、その敷地内から弥生時代から中世にかけての水主神社遺跡が確認されている。そのほか、大社遺跡、別所遺跡、岩瀬庵古墳などが確認されている。



第45図 遺跡位置及び周辺遺跡 (1/25,000)

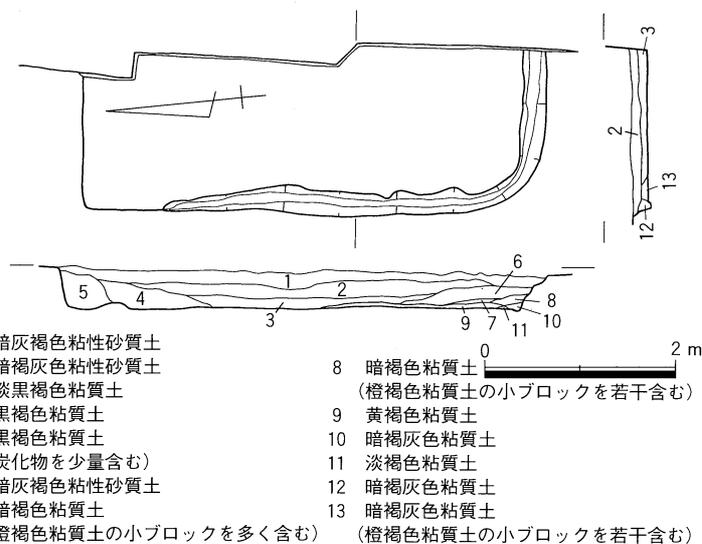
## 2. 調査成果の概要

本遺跡は県道大内白鳥インター線の拡幅工事に伴う調査で、幅13m、長さ約100mの約1,300m<sup>2</sup>を対象とした。調査区の設定は北からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区の順で設定した。地形は河川堆積による埋没した平坦地で概ね南から北へ向けて緩やかに傾斜する。検出した遺構は古墳時代後期から末期にかけての住居跡43棟、ピット・土坑、自然河川などである。ピット・土坑についてはそのほとんどが所属時期不明である。自然河川は3本確認できた。うち、Ⅰ区のS R01は古墳時代末期に埋没したものと想定できる。遺物は縄文時代から近世にかけてのものが確認できたが、古墳時代のもの以外はそのほとんどが自然河川内から検出したものであり、本遺跡周辺、特に南方に関連する遺跡が存在する可能性が予察できるとどまる。ここでは、古墳時代の住居を中心に概略を提示する。

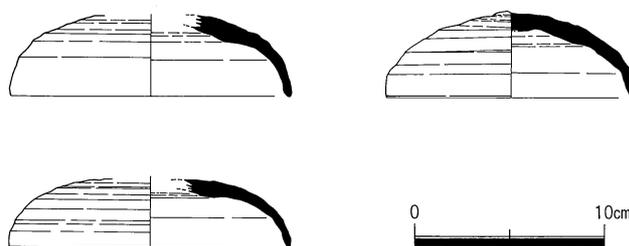
### (1) Ⅰ区

この調査区では11棟の竪穴住居跡・69基のピット・4基の土坑、自然河川S R01を検出した。竪穴住居跡はカマドの存在が明確なもの7棟、不明瞭なもの4棟を確認した。カマドの位置はいずれも住居の北壁に造り付けられていたと考えられる。また、S H05・S H06・S H09でカマド内部から支脚を検出した。S H05・S H09の2棟は須恵器の高杯の脚部や高杯の完形品を転用し、燃烧室床面に置いただけのものであったが、S H06は土製の支脚を燃烧室に据え、根元を黄色粘土で補強している様子を確認した。主柱穴の存在は不明瞭で、わずかにS H07・S H09でそれとわかるものを検出したに過ぎない。出土遺物は各住居で須恵器・土師器を検出したほか、S H05床面直上付近でメノウ製の丸玉1点、S H07カマドの煙道床面直上付近で滑石製白玉1点、S H10埋土中から鋤先と想定できる鉄製品を検出した。

S H11 調査区中央東端で検出した方形の竪穴住居跡である。床面積の約2/3が調査区外へ延びるため、規模の詳細は不明であるが、現存する規模は南北4.9m、東西1.8m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN10° Eを測る。主柱穴は下層に自然河川S R01が存在し、その埋土と同様の土が流入しているためか不明瞭で確認できなかった。S R01の掘削中に検出したため部分的に破壊してしまったが、南壁から西壁の3/4まで壁溝が回っていることを確認した。深さは床面から約0.05mを測る。カマドの存在は住居の主軸付近の北壁に位置したと想定できるが、調査



第46図 S H11平・断面図



第47図 S H11出土土器実測図

区外に出てしまっており詳細は不明である。

遺物は須恵器、土師器を検出した。北壁付近の床面直上で検出した須恵器の杯蓋から、この住居跡の所属時期は6世紀後半頃のものとして想定できる。

S R01 調査区南部で自然河川S R01を検出した。部分的な検出のため詳細は不明であるが、西南西から東北東の方向へのびていると想定できる。流路の埋土中からは須恵器や土師器を破片の状態で見出した。複数の時期の遺物が含まれているが、最終埋没は出土した須恵器片から6世紀中頃と考えられる。また、S R01の底部から弥生土器が数点出土した。高杯および甕を確認したが、いずれも河川による転磨がほとんど認められないことから、近隣に関連遺構が存在することが想定できる。また、この流路が弥生時代にはすでに存在していたことがわかる。

(2) II区

この調査区では20棟の竪穴住居跡・32基のピット・1基の土坑、自然河川S R01を検出した。竪穴住居跡はカマドの存在が明確なもの10棟、不明瞭なもの10棟確認した。カマドの位置はその大半が住居の北壁に造り付けられていたと考えられるが、SH11・SH14の2棟のみ西壁に造り付けられていた。また、SH20・SH11・SH07・SH02・SH12の5棟で燃焼室内から支脚を検出した。SH20・SH12の2棟は土製の支脚を、SH07では礎を転用したものをそれぞれ1本ずつ検出した。SH11およびSH02では礫の長軸方向を縦位に用い、2本ずつ並列させて支脚としている状況を確認した。支柱穴の存在はI区と同様に不明瞭で、わずかにSH11・SH19で検出できたに過ぎない。出土遺物は各住居で須恵器および土師器を検出した。

SH02 調査区南西隅で検出した方形の竪穴住居跡である。床面積の約3/4が調査区外へ延びることと耕作土直下で上面が削平されていることから、規模の詳細は不明であるが現存する規模は南北5.0m、東西2.8m、深さ0.5~0.15mを測る。主軸方位はN5°Eを

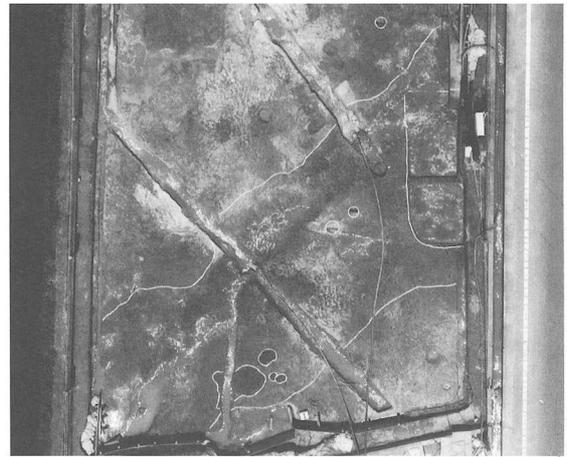
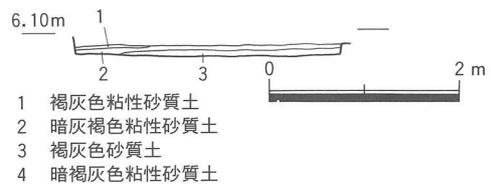
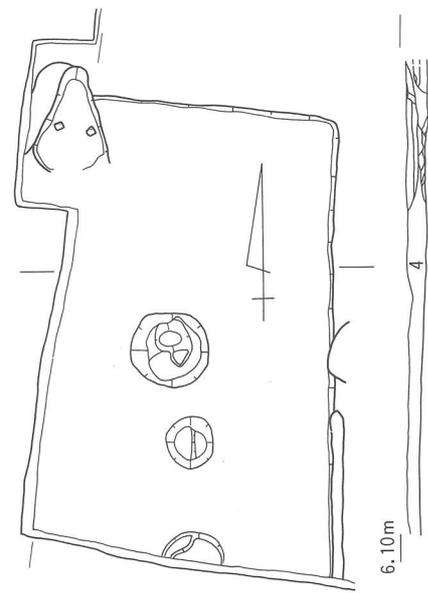
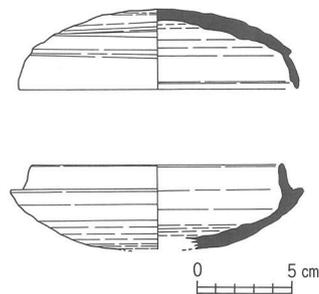


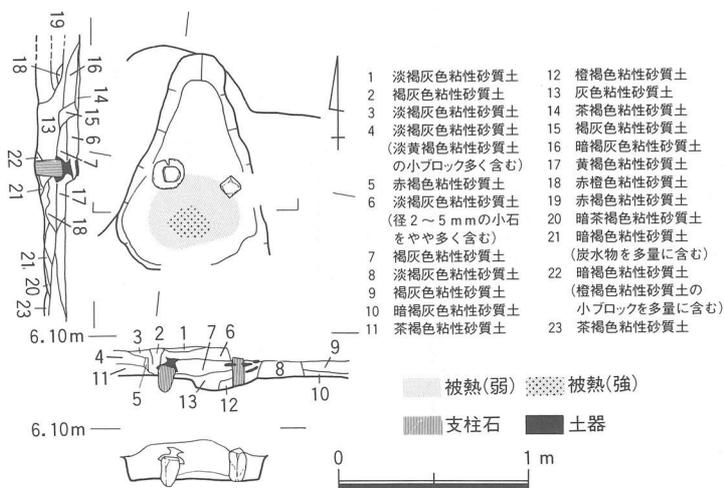
写真34 I区S R01



第46図 SH02平・断面図



第49図 SH02出土土器実測図

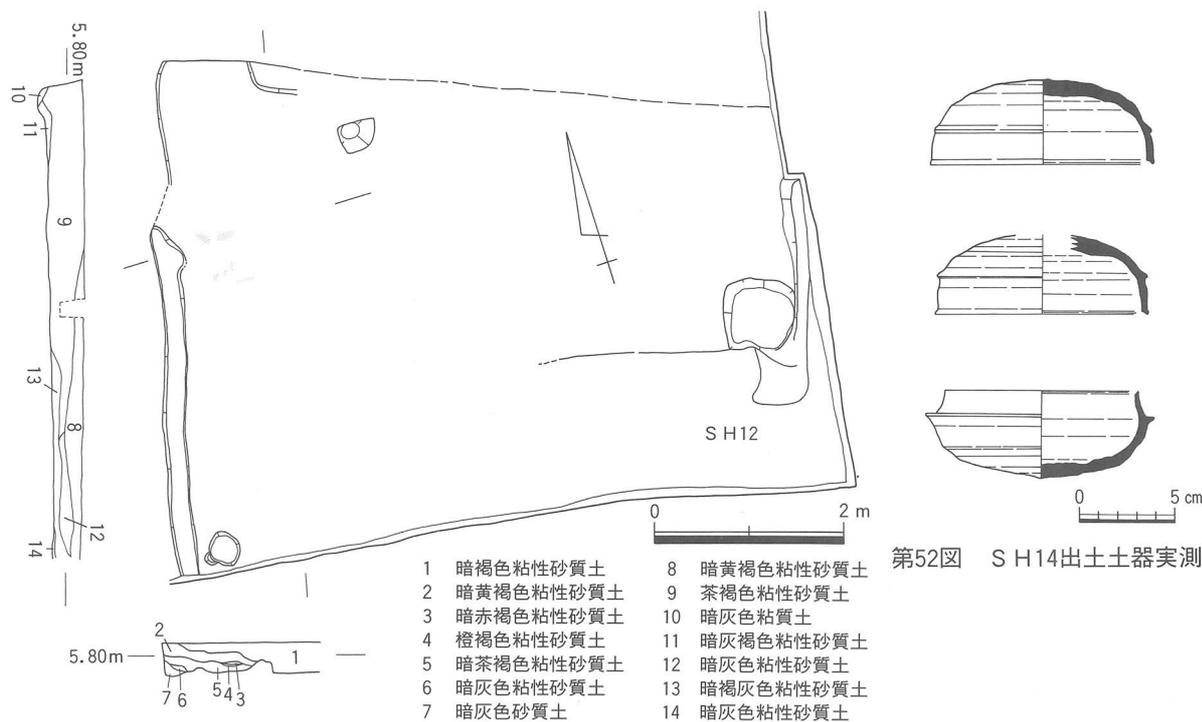


第50図 SH02カマド平・断面図



写真35 SR02カマド部(南東より)

測る。主柱穴及び壁溝は検出できなかった。住居の北壁で造り付けのカマドを検出した。壁体は下部が若干遺存していたのみであったが、燃烧室床面中央部で砂岩の角礫を用いた支脚が2本並列した状態を検出した。焚き口に面した部分の被熱による赤化が明瞭であった。また、燃烧室焚き口付近の床面も被熱に伴う赤化が明瞭に確認できた。遺物は須恵器、土師器をそれぞれ確認した。特に、土師器の高杯は西側の支脚の上に乗った状態で出土した。支脚と高杯の間に焼土が挟まっており、カマドの天井上面においてあったものが壁体の崩落に伴い支脚の上に落下したものと想定できる。また、カマドの東側に土師器を中心とする土器溜まりが存在し、住居が機能している間に洪水等で一気に埋没した可能性が想定



第52図 SH14出土土器実測図

スクリーントーンは被熱部分

第51図 SH14平・断面図

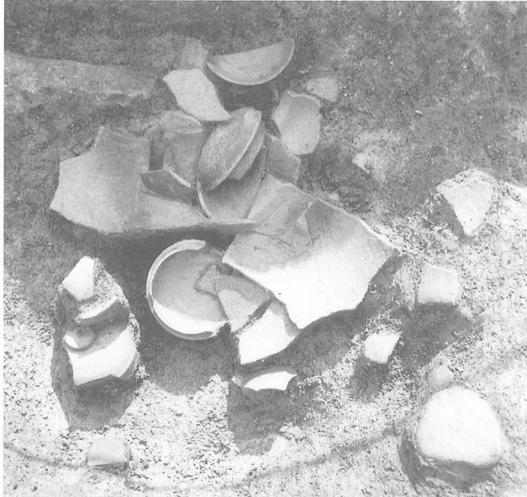


写真36 SH14東壁際遺物出土状況



写真37 SH14カマド部遺物出土状況

できる。住居の所属時期はカマド周辺から出土した須恵器杯から6世紀中葉のものと想定できる。

SH14 調査区南部東寄りで検出した方形の竪穴住居跡である。床面積の約3割が調査区外へ延びており、全体の規模の詳細は不明であるが、現存する規模は南北5.5m、東西6.6m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN75°Wを測る。支柱穴の存在は不明瞭であった。ほぼ住居の全周をめぐる想定できる床面からの深さ0.1mの壁溝を検出した。また、西辺で造り付けのカマドを検出した。壁体は崩壊していたものの、内部および上面から土師器の甕、須恵器の杯身・杯蓋などを検出した。さらに、カマドの南側では壁溝に沿って土師器の甕・小型短頸壺を1点ずつ検出した。甕は土圧による破損が著しいがほぼ完形に復元できる。短頸壺はほぼ完形を保って出土した。カマドのほぼ対辺の東壁際では土器溜まりを検出した。SH14の南側でSH12によってやや切られているものの、0.4m四方の方形を呈し、もっとも深いところで深さ0.15mを測る土坑の中に集中しており、須恵器の杯身・杯蓋のほか、有蓋高杯を確認している。当住居跡の所属時期は出土須恵器から6世紀初頭のものとして想定できる。

### (3) III区

この調査区では11棟の竪穴住居跡・57基のピット、自然河川SR01・SR02を検出した。カマドの存在が明瞭な竪穴住居跡はSH06およびSH12の2棟のみで、あとの住居はいずれも不明瞭であった。カマドは北壁に造り付けられている。また、SH12では



第53図 SH10平・断面図

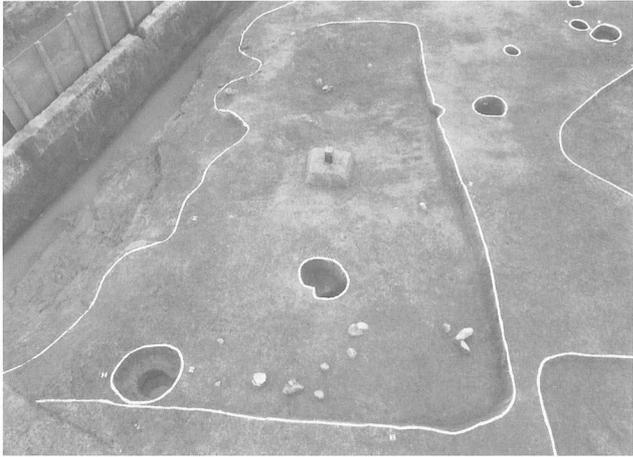
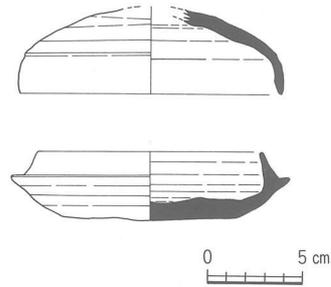


写真38 SH10 (南より)



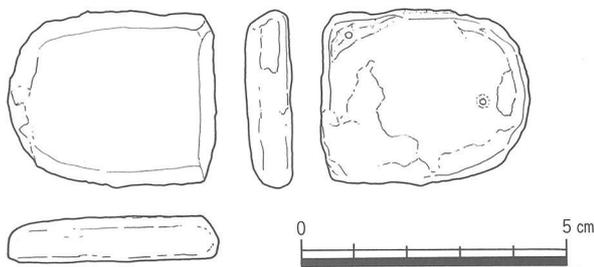
第54図 SH10出土土器実測図

土師質カマドの破片が出土した。設置位置は不明である。支柱穴の存在は不明瞭なものがほとんどで検出できなかった。出土遺物は各住居で須恵器・土師器を検出したほか、SH01床面・SX01埋土SR01からそれぞれ石製紡錘車を検出した。また、SH10床面直上からガラス製小玉を1点検出した。土坑SX01では上記の石製紡錘車のほか、須恵器の杯身・杯蓋・高杯・平瓶、土師器甕、刀子と考えられる鉄製品を確認している。

SH10 調査区中央部やや西寄りで検出した方形の竪穴住居跡である。住居の西側は自然河川SR01により削平を受けており、規模の詳細は不明であるが、現存する規模は最大長6.5m、最大幅3.6m、深さ0.1mを測る。主軸方位はN20°Wを測る。支柱穴は不明確ながら1基確認できた。壁溝は確認できなかった。カマドは遺存しておらず、その詳細は不明である。出土遺物は住居の南東隅の床面直上から須恵器片を検出したほか、床面ほぼ全体から須恵器・土師器をそれぞれ破片で検出した。また、住居北東隅の床面直上からガラス製小玉を1点検出した。これが確認できた時点で周辺の埋土を全て持ち帰り、水洗選別を行なったが、出土した1点以外確認はできなかった。この住居の所属時期は、出土遺物から6世紀中葉頃のものであると想定できる。

SR01 調査区西壁際で確認した自然河川である。調査区南南西からその肩が見え始め、北北西へ向けて出てゆく様子を確認した。調査区内ではその平面形は緩やかな曲線を描く。断面は流路の肩から急激に下へ落ち込む様子を確認しており、平面で確認した緩やかな曲線を描く様子と一致している。埋土は、その上層では粘性粗砂が多くしめていたものの、下層では暗褐色から黒褐色、最下層に近い位置では青灰色のそれぞれ粘質土が堆積しており、その流れがやや緩やかでよどんでいた時期があることがわかる。

この流路に含まれていた遺物は古くは縄文時代のものから弥生・古墳・古代・中世の各時期にわたっている。特に多いのは古墳時代のものであるが、奈良時代のもので推定できる帯金具を1点検出した。出土したのは鉞尾の部分であるが、錆による劣化が著しく詳細は不明である。しかし、県内でも出土例は限られている上、東讃では初の帯金具出土例ということで貴重な資料であるといえる。ただし、調査区内では関連遺構が確認できていないため、現位置を離れたものであると判断した。このSR01については、最終的に埋没したのは出土遺物から中世まで下ると想定できる。



第55図 Ⅲ区S R01包含層出土帯金具

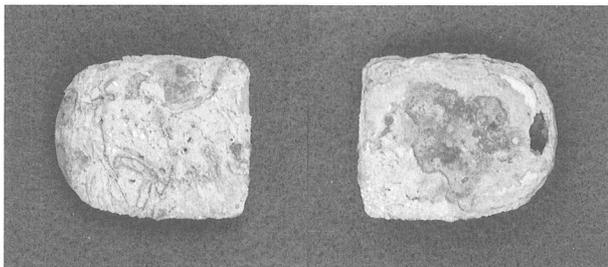
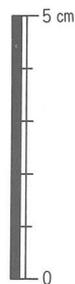
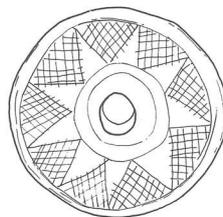
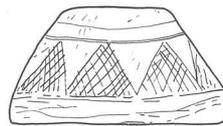


写真39 帯金具 鈍尾(左)表(右)裏

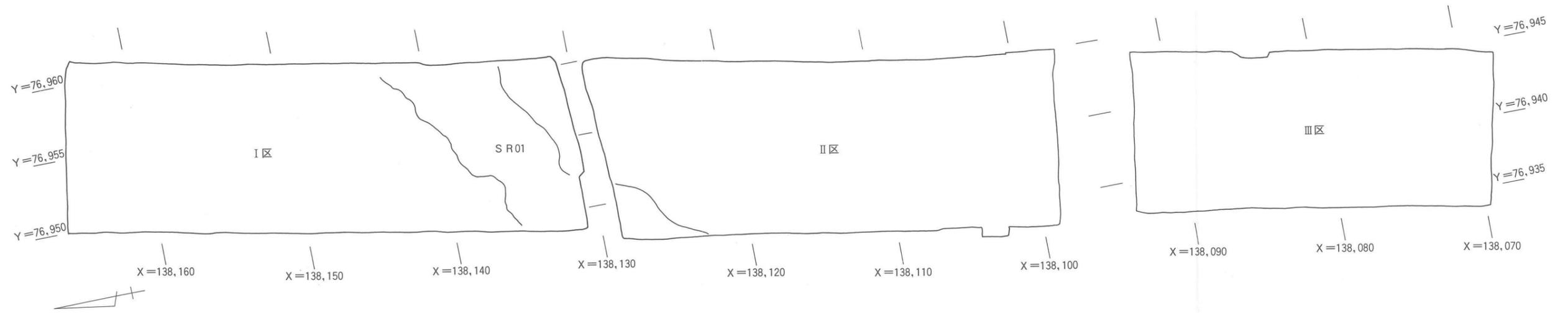


第56図 Ⅲ区S X01出土滑石製紡錘車

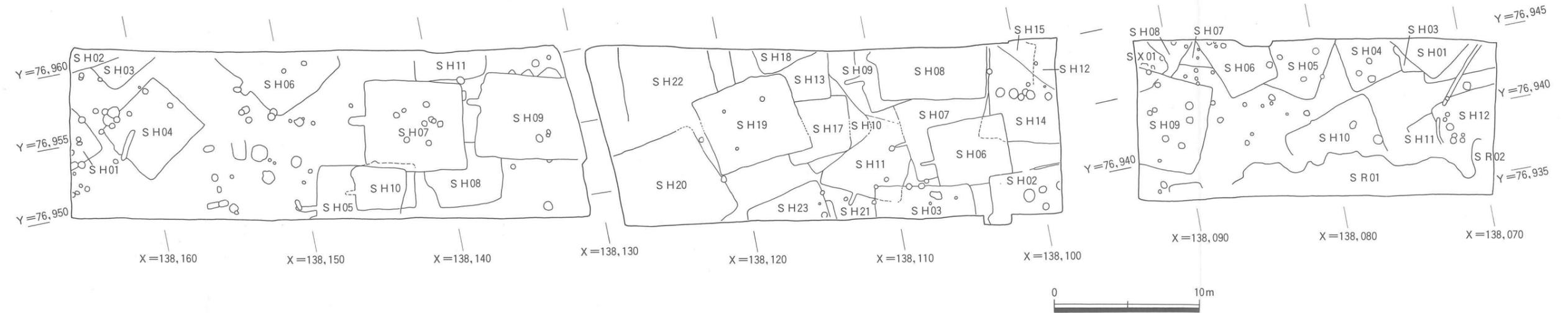
S R02 調査区南壁中央付近からS H12を切る形で検出した流路である。詳細は不明であるが、調査区南側へ向けて落ちており、調査区外に主流域が存在するものと判断した。

### 3. まとめ

当遺跡について各調査区ごとに検出遺構・遺物を取り上げて簡単に触れてきたが、今回の調査により古墳時代後期にこの地域に集落が存在することが判明した。ただし、総数43棟と検出した竪穴住居跡の件数が多いこととそれらの切り合い関係が極めて複雑なこと、それぞれの住居内の埋土が大きく数層にしか分離できず、比較的短時間で埋没した状況が想定できること、各住居においてその埋土中から複数の時期にわたる土器が検出されたこと、床面と地山の分離がきわめて困難であったことなどから、これら住居跡の所属時期の判定は困難を極めた。なかには床面と判断した位置から出土した一個体の甕の破片群の直上でサヌカイト製の石槍の未製品もしくは石核を検出した住居も存在し、床面直上資料が時期決定となり得ない可能性もあった。したがって、43棟の住居跡の中でカマド内部もしくはその周辺の床面直上資料と土器集中個所の対比の結果、時期的に一致すると判断した資料をここでは提示できたに過ぎない。今後、出土した土器から各住居についての時期決定を行なわねばならないこと、周辺の既知の古墳との関係を考察するなど多くの課題が残されている。



第57図 住屋遺跡遺構配置図(下層)



第58図 住屋遺跡遺構配置図(上層)

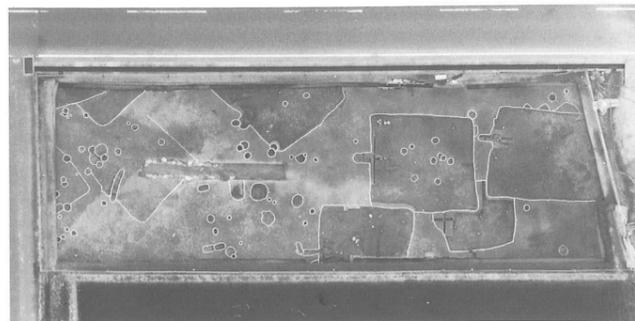


写真40 I区(上層) 遺構全景



写真41 II区(上層) 遺構全景

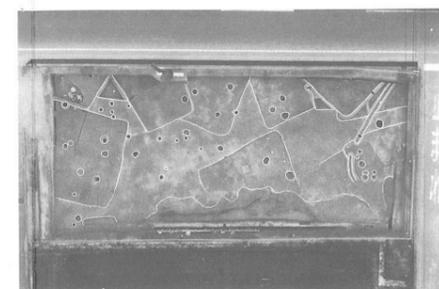


写真42 III区 遺構全景

## Ⅷ. 原間遺跡

### 1. 遺跡の立地と環境

県道原間遺跡は、大川郡大内町と白鳥町の町境の南側から伸びてくる山裾から流れてくる古川が形成する緩斜面に立地しており、東に原間池、北東方向には標高97.1mを測る独立丘陵が、南には山塊が、西には与田川及び古川が形成したと考えられる氾濫原が広がる。

### 2. 調査成果の概要

本遺跡は県道白鳥・大内インター線建設工事に伴い、5,343㎡を対象とした調査である。調査区の設定は東からⅤ区・Ⅵ区・Ⅶ区の3区を設定し、Ⅵ区及びⅦ区はそれぞれ更に小調査区を設定した。したがって、調査は5区に分けて調査を進めた。

地形は古川及び与田川の氾濫原によって形成された緩斜面に立地しており、調査区内を複数の旧流路が流れていたことがわかった。流路の最終埋没については検討を要するものがほとんどであるが、概ね弥生時代後期から中世にかけてのものであると想定できる。

今回は、各調査区ごとに概況を簡単に提示するのみにとどめる。

#### (1) Ⅴ区

本遺跡でもっとも東側に位置する調査区である。

弥生時代の遺物を含む包含層を有する自然河川の東岸と、所属時期の判明しない溝を8本検出した。東側から丘陵の裾が延びてきており、その先端部を近年削平して耕作地としていたようで、篠竹を束ねて埋めた暗渠を検出している。

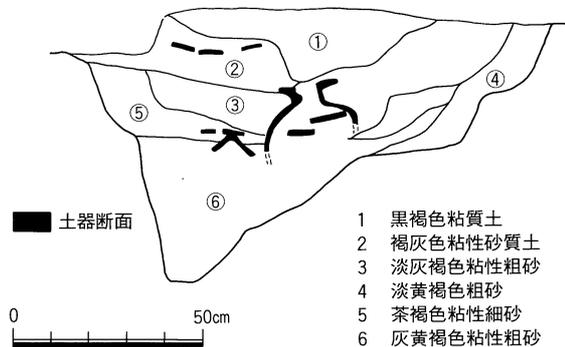
出土遺物は弥生土器片のほか、石鏃を含むサヌカイトの剥片類が数点出たのみである。



#### (2) Ⅵ区-①

古川を挟んだⅤ区の対岸に位置する調査区である。自然河川を6本検出したほか、土坑8基・ピット32基を検出した。そのうち、土坑SK04・SK05・SK08については弥生土器をやや多く検出しており、近隣もしくは調査区内上面の削平された部分に住居などが存在していた可能性を示唆する。ただし、近接して不定形に並ぶ柱根を持つピットを5基確認しており、上面の土を重機で掘削する際に住居を削平している可能性もある。

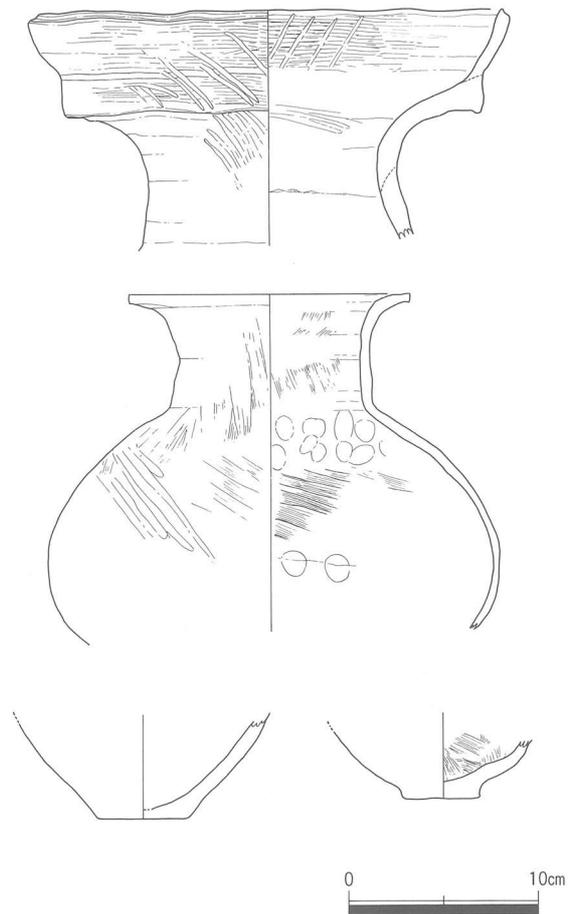
L=14.20m



第59図 SK04平・断面図



写真43 S K 04(上)・S K 05(下)

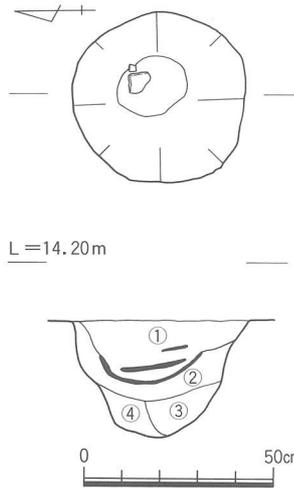


第60図 S K 04出土遺物

土坑内の資料は未整理であるため、詳細は不明であるがいずれも弥生時代後期頃のものとして推定でき、比較的一括性が高いものと想定できることから東讃における当該期の良好な資料として位置づけられるものである。

また、調査区西端ではVI区-②から延びてくる自然河川S R 02'の東肩を検出しており、杭と想定できる加工木を数本確認している。

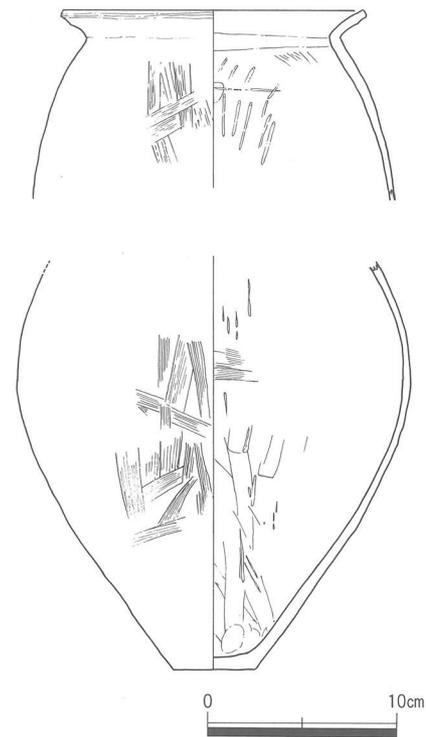
その他の遺物は、調査区東側に広がる包含層で弥生土器片のほか、須恵器片・土師器片・石鏃を含む石器類を検出した。



■ 土器断面

- 1 暗褐色粘性粗砂
- 2 淡褐色粘性細砂
- 3 淡褐色粘性細砂
- 4 褐色粘性細砂

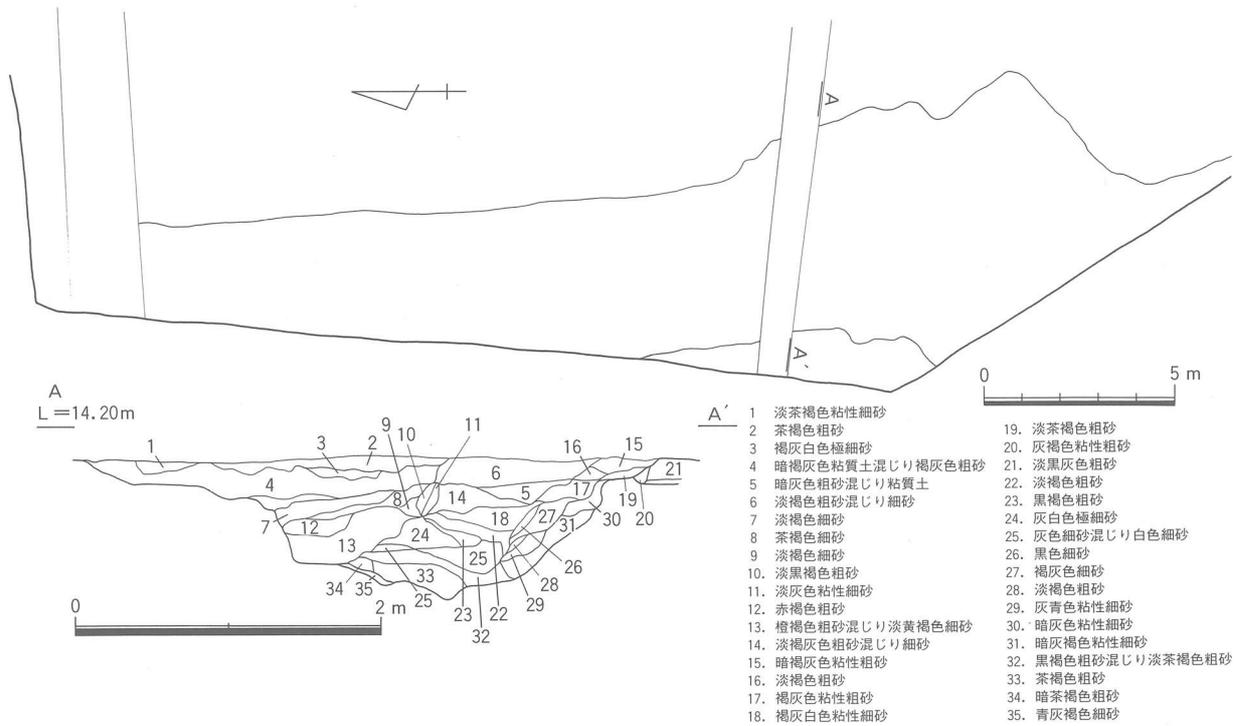
第61図 S K 05平・断面図



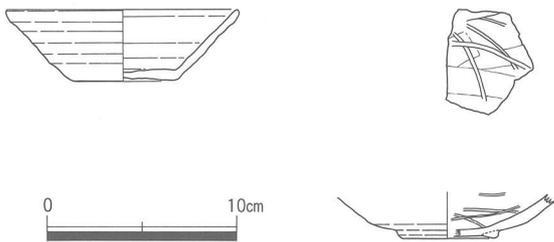
第62図 S K 05出土遺物

(3) VI区-②

調査範囲内の中央部に位置する調査区である。西端は大内町と白鳥町の町境にあたる。検出遺構は土坑3基である。また、自然河川を4本検出したほか、条里の坪界溝と想定できる南北方向の溝S D01を検出した。南側の上面を後世に自然河川が流れており、正確な方向は確認できなかったが、主軸はN 8° Wを測るようである。遺物は少量ながら、縄文時代から鎌倉時代頃までの遺物が包含される。最終的な埋没は13世紀頃と想定できる。自然河川のうち、S R02' の底部からは植物遺存体と共に杭と想定できる加工木を約120本検出しており、その検出面の前後から出土した土器片から縄文時代後期の遺構として位置付けられる可能性がある。当該期の杭の出土例は県内では2例目であり、貴重な資料であるといえる。また、出土した土器片もやや転磨の痕跡を残すものの概ね良好な遺存状態を示しており、杭の詳細な時期決定を行うに当たって有力な資料となると言える。



第63図 S D01平・断面図



第64図 S D01出土遺物



写真44 S D01土層

(4) VII区-①

調査範囲の中央西寄りの調査区である。溝状遺構32本・ピット22基・性格不明遺構5基を検出した。いずれも深さ約0.2m前後の浅い遺構である。溝状遺構は1本を除き、いずれも南北方向に延びている。いずれの遺構もほぼ同様の埋土が入っており、時期的に近接したものと考えられるが、詳細は不明である。

遺物はほとんど出土しておらず、著しく磨滅した土師器片がわずかに確認できたのみである。

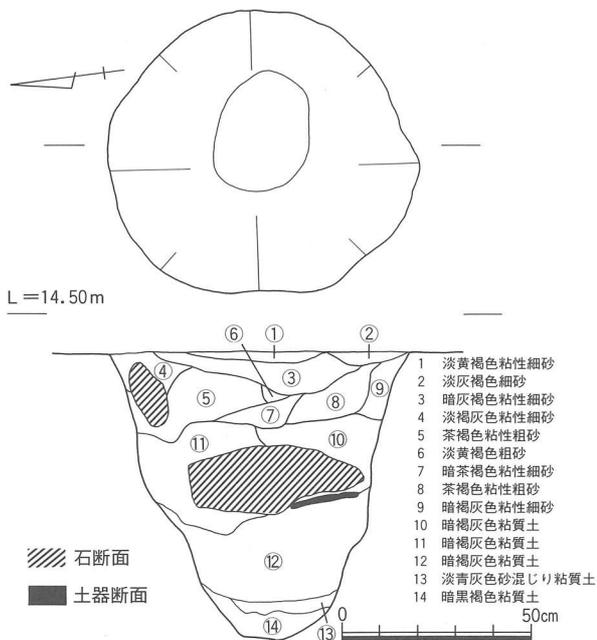
(5) VII区-②

西端の調査区である。調査対象面は2面存在した。

上面では溝状遺構22本のほか、ピット80基・土坑1基を検出した。土坑のうち、SK08は直径約0.8m、深さ約0.8mを計り、上面から底部へ向けて緩やかにすぼまってゆく形状を呈す。土坑中層中央部に人頭大の礫数点が落ち込んでいた。礫表には黒色の煤らしい付着物が認められることから被熱していることが想定できる。さらにその下からは炭化物、桃の種などが出土しており、何らかの祭祀遺構である可能性が想定できる。この土坑の埋土中で土師器碗及び甕の破片を確認しており、その形状から12世紀後半頃のものと同定できる。

その他の遺構からはVII区-①同様、ごくわずかの土師器片・須恵器片が出土したのみで、詳細な時期については不明である。

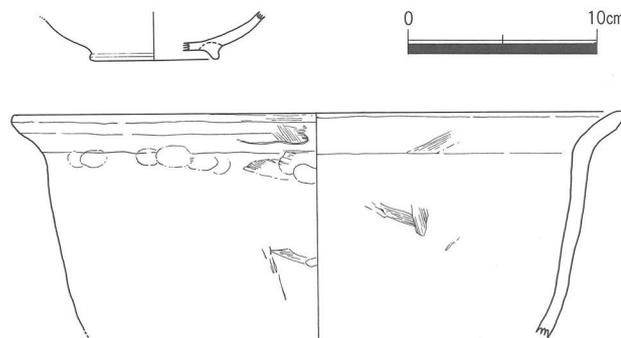
下面では自然河川を2本検出している。西側の流路は調査区西端で検出した。VI区-②のSD01からほぼ1町を計るため、SD01同様条里の坪界溝である可能性が想定できたが、SD01とは逆方向の東へずれるため、自然河川であると判断した。東側の流路は調査区中央で検出した。黒褐色粘質土が著しく堆積しており、同層内に植物遺存体を大量に包含していた。それとともに縄文土器片4点とサヌカイト片2点を検出しており、縄文時代に堆積した層であることが想定できるほか、近隣に縄文時代の遺構が存在する可能性が想定できる。



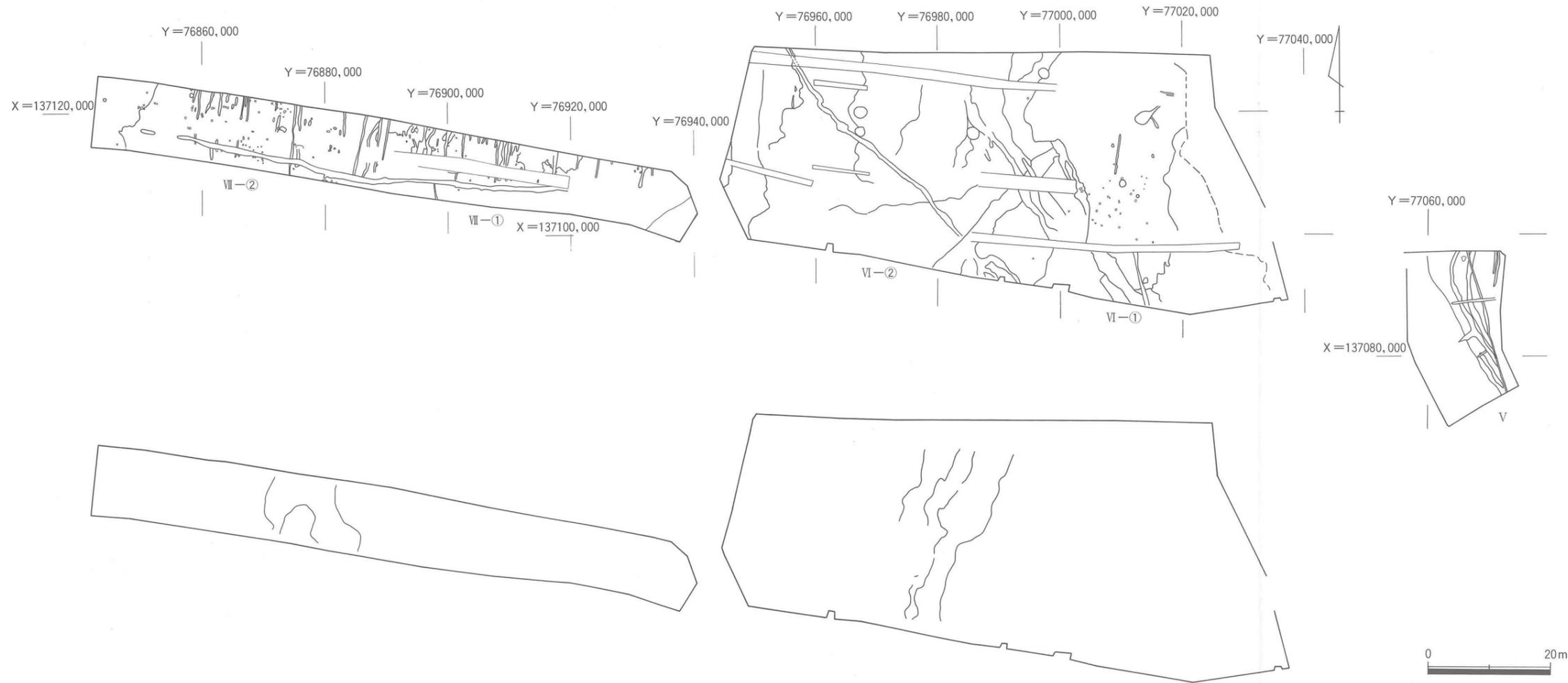
第65図 SK01平・断面図



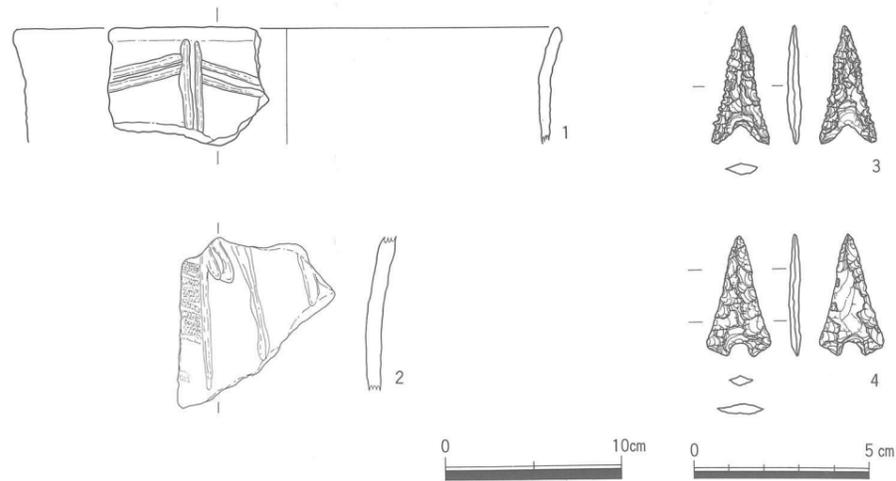
写真45 SK01遺物出土状況



第66図 SK01出土遺物



第67図 原間遺跡遺構全体図(上 上層 下 下層)



第68図 VI区-②S D01出土縄文時代遺物

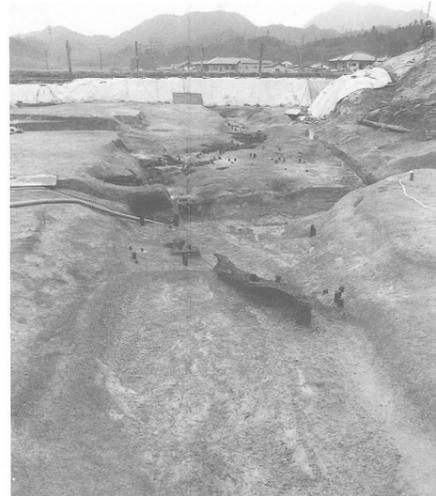
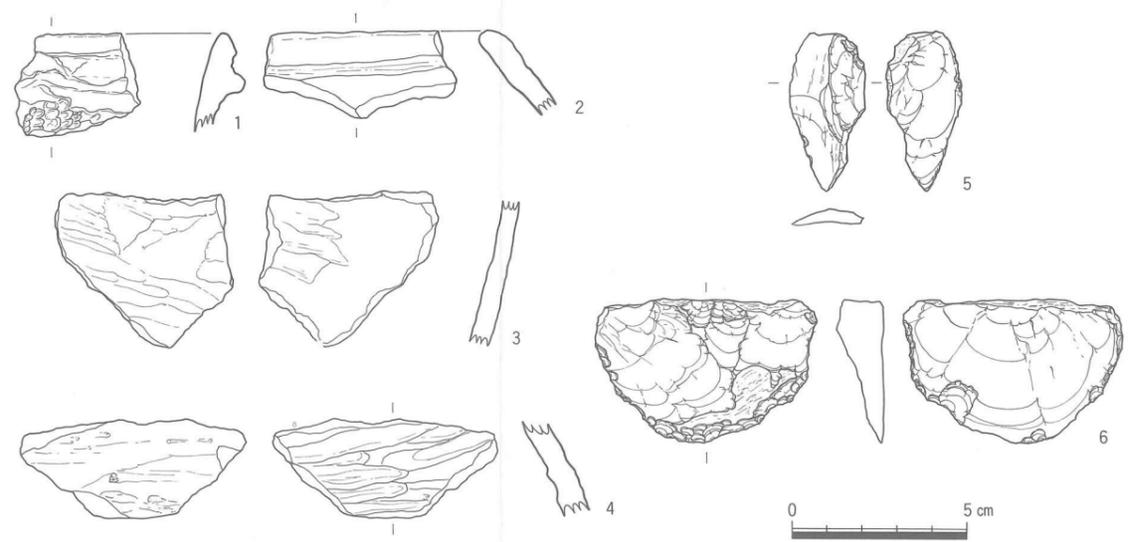


写真46 S R02'下層 杭検出状況(北から)



第69図 VI区-②S R02' 下層出土遺物(2,4 杭上面 3,6 杭打設面 1,5 杭下層)

### 3. まとめ

東西に長く南北に短い調査区であったが、以下のようなことが確認できた。

まず、当遺跡は南側に広がる四国横断自動車道建設事業に伴う調査で確認された原間遺跡（以下横断原間遺跡と称す）からやや離れた位置に存在するが、生活面としては大きく括った原間遺跡の北限からやや離れた部分であることが想定できる。その根拠として遺構の数が少ない点が挙げられる。横断原間遺跡では弥生時代後期頃に位置付けられる集落が確認されており、遺物の量も埋没した河川内から数多く検出されている。一方、当遺跡では検出した遺物の数はごくわずかで、多くが転磨を受けた破片である。

これは、どの調査区も複数の自然河川が南北に横切っており、それらの河川が上流の遺構を削って、当遺跡まで運んできたものであることを示しているといえよう。ただし、即断するにはやや難点もある。それは、遺構面が水田耕作面直下から検出されていることである。調査区はⅦ区-②から始まり、調査区中央のⅥ区-②からⅥ区-①にかけて緩やかに傾斜して現在の古川に至る。耕作以前の地形も概ね同様のものであった可能性が想定できるが、耕作により、著しく地形が改変されていることも想定できる。このことから、遺構面の高い西側の遺存状況が不良であり、東側のⅥ区-①で検出した土坑群の遺存状況が比較的良好であったことの説明ができよう。今後、横断原間遺跡での調査結果と突き合わせて詳細な検討を行なう必要がある。

次に、縄文時代の遺構の存在が想定できる点である。当遺跡内の自然河川から複数の縄文時代の遺物として位置付けられるものを確認したが、土器片は著しく転磨を受けており、上流から流されてきたものが多いことが想定できる。したがって、当遺跡の南側の調査区外に関連遺構が存在することが想定できる。ただし、Ⅶ区-②の下層で検出した流路内の土器片は、比較的転磨の痕跡が弱いほか、緩やかな流れによって堆積したと想定できる植物遺存体を多く含む粘質土内から検出した。また、Ⅵ区-② S R 02' では、性格などについては現在不明であるものの配列に規則性を認める杭を検出したほか、やはり比較的転磨の痕跡の弱い土器片を認める。このことから、調査区外の南側の比較的近いところに関連遺構が存在することが想定できよう。

以上のことから、今後詳細な分析を行った上で本報告に結びつけてゆく必要がある。

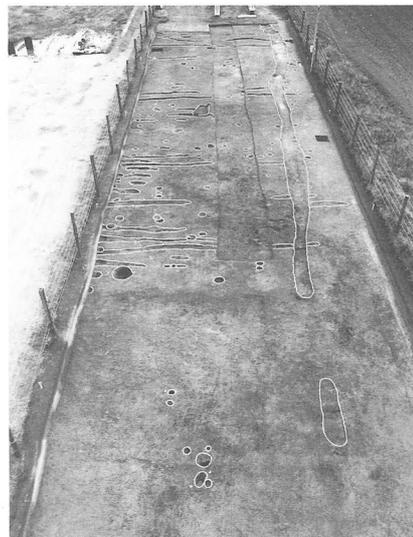


写真47 Ⅶ区-②遺物出土状況  
(西から)



写真48 S R 02' 下層杭検出状況 (北から)